

刀匠信国系図の総合的研究：山城信国を中心に

Comprehensive Research on Genealogy of the Nobukuni Group Swordsmith

福田 博同

Hiroatsu FUKUDA

抄 録

刀匠〔信国派〕は山城、豊前、筑前、越後、南部等へ伝播した。従来の研究では個別に〔山城信国〕や〔筑前信国〕だけを研究しており、例えば、なぜ〔源信国〕の後代が〔平信国〕を名乗るかは「要研究」となる。本稿では、信国家の書入れ、藩の記録、新出の系図、過去帳の再調査を含め、総合的に研究し旧説を正し、より史実に近い系譜を推敲する。【国立国会図書館デジタルコレクション】(略称「国会デジコレ」¹⁾)、【国指定文化財等データベース】²⁾等デジタルデータの公開が増えた故、芸術情報学の立場から記述する。なお、紙面の都合上、山城信国、宇佐初期までを考察し、「筑前信国を主として」は別稿に記す。

キーワード：刀匠,信国派,山城鍛冶,来派,了戒,新藤五国光,長谷部国重,正宗,貞宗

1 はじめに

南北朝時代から昭和初期まで続いた刀匠〔信国派〕は〔山城信国〕、〔筑紫信国〕、〔南部信国〕、〔越後山村派〕、諸国に大別される。従来の研究では、それらを総合した研究はなく、本稿では新出の史料を提示し、諸説を再考し、より史実に近い系譜を推敲する。ネット上でのデータ公開により、敬称は省略しない。また、リンクは2017年2月11日にすべて確認したので、個々には閲覧日を記載しない。さらに、リンクがNot Foundの場合、Webアーカイブである【WayBack Machine】³⁾で救われる場合があるので利用されたい。「国会デジコレ」には書影公開分、「送信参加館」、「国会図書館内限定」があるが、近隣の図書館が申請し認められた場合「送信参加館」で利用可能(「国会デジコレ参加館」と略称)。なお、書影を公開している場合、注記に「書影」と記載し、「国会デジコレ参加館」「国会図書館限定」は「書影△」と記載した。また、写本等にある注記(例：ママ、等)は0、今回筆者が加えた注記は[]とした。江戸時代までの資料は史料と記載した。また、デジタル処理の効率化のため、解説や典拠が必要な項目は以下のようにタグに意味を持たせた。《作品》、〔人名団体〕、【事項】、『典拠資料』、{場所}、〈時〉。脚注は【ハーバード方式】に名前を加えた⁴⁾。まず、系譜を概略す

ると以下の通りである。

1.1 系譜概観

○〔山城信国〕

〔初代信国〕は〈元応頃(1319-20)〉に〔京都〕の【法師鍛冶】〔了戒〕の手に付き鍛冶執行数十年、〈建武〉頃(1334-35)、または、延文(1354)頃から活躍した。延文三年、貞治二年(1363)等の銘があるが諸説がある。〔建武信国〕の存在、初代、二代、三代、〔源左衛門尉信國〕や〔源式部丞信国〕等の同定問題がある(以下この項の典拠は後述する)。

○〔筑紫信国〕(〔宇佐信国〕、〔筑前信国〕等)

〔三代信国〕源左衛門の次男〔信国吉家〕は〈永享十二年〉(1440)、〔安心院吉門〕に招かれ、豊前宇佐〔安心院〕に住む。吉家より八代〔信国吉秀〕までは安心院に住む。

○〔筑前信国〕

九代〔信国吉貞〕は安心院氏滅亡により〈慶長七年〉(1602)、〔黒田長政〕に従い〔福岡〕へ移住。以降、本家は次男〔信国吉次〕が継ぎ、途中断絶があったが、明治まで続く(〔信国家〕)。吉貞の長男〔信国吉政〕は藩命により〔備前伝〕を受け別家し、明治まで続く(〔筑前信国家〕)。

三男〔信国吉助〕の系譜は三代〔信国吉親〕で断絶した。四男〔信国吉正〕は〔秋月〕に移住、その四代〔信国安俊〕が福岡に戻り、安俊の次男〔信国光昌〕が吉政家を継ぐ。

〔信国吉秀〕(吉貞の父)の弟〔信国吉盛〕は安心院氏滅亡により、慶長頃(1596-1614)、〔早良郡福崎町柳原〕に居住、昭和初期まで続く。

○〔南部信国〕

二代〔信国吉政〕の次男〔新藤国義〕が〔南部重信〕公の招きで〈天和年間〉(1681-83)、〔盛岡〕へ移住、明治まで続く(〔新藤国義家〕)。長男〔信国平兵衛〕も南部重信に抱えられ、明治まで続く(〔新藤信国家〕)。

○〔越後山村派〕

〔信国源五郎〕(初代信国の弟)の子の〔信国定国〕(〔正信〕とも)は応安二年(1369)の作例があるが、〔越後〕の豪族〔山村正信〕を指し移住(〔越後山村派〕)。明德頃(1390-93)、源五郎の子は越後に移住、後に〔若狭〕に移住した。

○諸国

〔応永〕の頃(1394-1427)、〔近江〕、〔園城寺信国〕〔備州長船〕住信国がいる。

〈元治二年〉(1865)、京信国十六代後胤に〔長州〕住〔信国吉定〕がいる。

2 典拠資料

典拠となる史料群には、刀匠記入の系図、由緒書、日記、あるいは藩の老中日記等、菩提寺の過

去帳、墓碑銘、同時代や後代の鑑定書、研究書、あるいは、刀身の形状、【鍛え】⁵⁾、【刃文】⁶⁾、【梵字】や図などの彫物、【中心|茎】⁷⁾に施される【銘】⁸⁾(【表銘】(太刀や刀を佩(は)く場合の外側)、裏銘、【二字銘】(刀工名のみ)、【長銘】(生国等も切る)、【代銘】(子や弟子が師匠許可で師匠銘を切る)、【無銘】、【朱銘】(無銘刀に鑑定者が作者名を朱漆で書く)、【金象嵌銘】(磨上無銘刀に鑑定者が作者名を象嵌する)、【偽銘】等がある。)、【鏝目】(ヤスリメ)⁹⁾や【刀剣押形】¹⁰⁾、図鑑や写真がある。ここでは〔信国派〕を主として、関連する〔了戒〕、〔来派〕、〔貞宗〕、〔正宗〕、〔新藤五国光〕、〔長谷部国重〕関係資料も検証する。

2.1 信国家の系図、由緒書、藩の記録

史料 1) 「信国初系図代々祖師付之事」(略称「吉貞記」『福岡藩仰古秘笈・卷二十五』所収¹¹⁾書誌)

慶長六年(ママ)[1601]三月二十八日、すなわち、筑紫信国九代目(京信国十二代目、筑前信国初代)〔信国吉貞〕が山城から{宇佐安心院}移住の経緯、〔細川忠興〕から離れ〔黒田長政〕に{筑前}へ招かれた経緯を記し、藩へ提出した由緒書。190年後の寛政三年(1791)八月十六日に〔福岡藩〕が本紙の通り筆写したもの。『福岡藩仰古秘笈・卷二十五』〔福岡県立図書館〕にある(写真1)。本史料は、史料4(『吉田家伝録』詳細は後述)にある「鍛冶記」に記されていた可能性もある。本史料の解説と訳文は〔久野繁樹〕氏「続筑前新刀の研究」(『刀剣美術』64号所収¹²⁾書誌)にある。注の解釈は後述するが、若干、読み違いがあるので全文を記載する。

- 一 元應之比[1319-20年]御帝[後醍醐天皇]=〔源氏大夫〕ト云公家有リ 其比帝ヨリ勅勘有就去テ禁裏ヲ出テ人民ノ交リ残念ノ泪甚シ 然ニ(此間切テ不知)知り末世ニ名ヲ留ント京〔了戒〕手ニ付鍛冶執行數十年心ヲツクシ其以後京五條ノ坊門ニ住シテ初テ〔信國〕ト打 貳代目モ信國ト打 後入道シテ法名〔虎熊入道〕ト號ス 刀脇指ニ法名アラハシタルハマレナリ 同三代目者中比〔定國〕ト打 後二者又信國ト打 俗名〔源左エ門〕ト號ス 建武ノ比[1334-35年]男子二人有 其比豐前國宇佐郡ノ守護人〔安智夢吉門〕ト號ス 其比如何成故ニカ王番ノ爲三年ノ在京有 其比信國源左エ門方ヘ重恩有リ 就去ニ源左エ門次男十九歳ニシテ其名ヲ〔徳千代〕ト云 安智夢公在國之節ヒクハンニ致シ豐前ニ下シ住ス チヤク男短命ニシテ手細(工脱カ)世上ニイクハイ無シ 就去京信國三代ニテ カンテン〔寒天〕ノ謂是也 扱其後〔宇佐信國〕安智夢公寵愛ナメナラス刀脇差鎗長刀他家エ打出ス事堅ク禁制也 去ニ仍テ宇佐信國ノ道具世上ニ希ナル事此故也
- 一 其後在京ニ召連ラレ 官位ヲ申付ラレ其時源氏ヲ蒙ル事此故也 其以後安智夢公御名乗ノ一字拜領シ〔源信國吉家〕ト打 宇佐信國ノ元祖是ナリ サレトモ安智夢公寵愛ニ仍テ世上ニ打出ス事マレナリ 應永ノ比
- 一 貳代目〔源信國吉包〕ト打 是モ後入道シテ法名〔勝是〕ト號ス 是モ同斷世上ハイクハヒマレナリ 永享ノ比[1429-41]
- 一 三代目〔吉政〕ト打 右同斷 寛正ノ比[1460-66]

- 一 四代目〔吉勝〕ト打 右同斷 文龜ノ比[1501-03]
- 一 五代目〔吉成〕得テ十文字ノ鎗打也 右同斷 享祿ノ比[1528-31]
- 一 六代目〔恆吉〕後ニハ〔吉次〕ト打 右同斷 弘治ノ比[1555-58]
- 一 七代目〔吉盛〕ト打 右同斷 天正ノ比[1573-93]
- 一 八代目〔吉秀〕ト打 慶長ノ比[1596-1615]
- 一 九代目〔吉貞〕ト打

古エ徳千代字佐エ下候時 親源左エ門ヨリ信國成立ノ系圖ノ卷物一册(ママ) 扱又手細(工)ノ手鏡トシテ
一尺ニ寸ノ脇指貳腰 一腰ハ所ノ氏神〔宇佐八幡〕ニ籠ル 今一腰者 家ヲ次代々ノ惣領ニ傳ヨトテ渡ス
尤刀脇指打様シカケハ紙面ニハ態不具 代々口伝ニテ引渡ス

- 一 慶長二年[1597]極月廿一日 不慮ニ類火ニ合 家財不殘焼拂 手細ノ手鏡家ノカラカツ(ママ)〔刀ヲカツ〕
重代手次ノ脇指漸取立退 其刻重代ユツリノ證文焼失ヒ申ニ付 右ノ紙面有増ノ通 書留置也
- 一 信國二人三人一所ニ刀ヲ打トテモ 末ノ子共ニハ 信國ノ國ノ字 本方ニ打ス 惣領ノ家ニバカリ 國
ト云字ヲ 如此内ヲ國左字ニ打留口傳アリ
- 一 安智夢公ノ家古ヨリ天正文祿[1573-95]ノアタリ迄數代長久アリ同信國モ代々ツキノイ勤 其節豊後屋形
ヨリ諸ワケ有テ安智夢公打ホロボシ 其時〔信國吉貞〕親同前ニ牢人ニテ暫居候処ニ 豊前六郡〔如水〕
公御シキ其比〔長政〕公拙者ヲ召出サレ御刀脇指數々被仰付打上ル所ニ難有御意之所ニ 其後無程御國替
筑前江御越之時分拙者ヲ召出シ妻子引候ヘト 御意有テ 八木〔米〕六十石拜領仰付故筑前ヘ引越申覺悟有
之所ニ ホドナク〔細川越中公〕豊前ノ國ヲ御シキ 御入國ノ刻拙者召出シ御尋ニハ 古ヘ京都ヘ信國有又
当國信國兩家ノワカリイカト有ルニ 仍テ右ノワカリ具ニ申上ル所ニ 越中公御意ニハ イニシエ名作
テキ侍ノ末葉國內ニ有リ調法カキリナシトテ御道具數々被 仰付打上候御感不斜御ヤシナイノ祿ヲ被仰
付ル 通沢村〔才八〕殿ヨリ御内意有ニ仍テ手前ヨリ申上ケ候ハ難有ハ存上候得共 長政公筑前エ御越ノ
節妻子引候ヘトテ 大分ノ八木ヲ拜領被 仰付候間タトタ御國ノ御暇ヲト申上候所ニ 越中公御意ニハ
長政江ハ大分ノ八木遣置候 夫ニテ其方ヘ取を八木リウヤウイタシ可遣 其上ニテモ筑前エ望有之ハ首ヲ
切可遣由被仰ル故ニ三年モ居留リ分別仕 慶長五年(本ノママ)二月十一日ニ彦山江參詣ト名附 子供二人
夫婦家頼兩人豊前ヲ立退漸御國江罷越候 即刻長政公御上聞ニ達シ 拾五人扶持ニ銀五百目被仰付御道具
打上候ヘハ賃金被下候 豊前數代之間賃金ヲ取道具打タル事ナシ 筑前エ引越長政公ヨリ賃金ト被仰付テ
初テ賃金取乃脇指打也 慶長ノ比ヨリ

〔信國助左エ門吉貞〕 花押

慶長六年三月二十八日

筑前移住時の経緯と典拠は次の通り。天正十年(1582)〔安心院公正〕が〔大友義鎮〕に滅ぼされ(大分放送編『大分歴史事典』¹³全文)、吉貞も浪人となる。天正十四年に〔黒田孝高〕が〔豊臣秀吉〕に【豊前国】を賜り、後【中津城】に居住した(天正十六年)。(〔信國吉貞〕は孝高の命で作刀している(〔貝原益軒〕『筑前国統風土記 卷二十九 土産考. 上』の記事:¹⁴書影)。天正十七年(1589)〔黒田長政〕が豊前を父孝高から委譲された(『綜合福岡藩年表』)¹⁵書影)。文祿元年(1592)、長政に従い【袋鎗】を制作(『福

岡県史』通史編.福岡藩.文化(下)¹⁶ 書誌)、益軒の記事はこの頃のことか)。慶長五年(1600)、〔細川忠興〕(越中公)が豊前を拝領し¹⁷ 書影)、同年十月に長政が筑前を拝領している(『綜合福岡藩年表』¹⁵ 書影)。越中公に仕えて三年留まった場合、慶長八年であり矛盾がある。前掲『筑前国風土記#巻二九 土産考上』コマ 6⁴⁷ 書影)に、「慶長七年二月、筑前に来たりしかば(後略)」と記されているのが正しく、慶長六年は写本の誤写と思われる。また、吉貞は慶長二年に類火で信国成立の巻物を焼失したので、七代までの活躍年号の記憶は不確かな部分もあろう、史料 2),4),7)等と比較し後述する。

史料 2)「柳原信国系図」(略称「柳原系図」)¹⁸⁾

〔柳原信国家〕は〔筑紫信国〕八代目〔信国吉秀〕の弟〔信国吉盛〕の家系。やはり慶長の流浪の後、福岡の{早良郡福崎町柳原}の地に居住し、姓を〔柳原〕とした。末裔の〔信国国利〕氏のご許可で刀匠関連部分を掲載する(写真 2)。吉盛は類火に合わず、先祖供養の為の没年や追号¹⁹⁾も掲載され、諸系図中最も正しいと思われる(——は連結、十、十は分岐、また十の下方には次男等がいるが、農業等の場合省略する)。ここでは、紙面の都合上、吉盛の子〔信国吉助〕まで(筑前移住時)を考察する。

〔國吉〕——〔國行〕——〔國俊〕——〔來國俊〕——〔了戒〕——〔信國〕長谷部式部丞 京五條防門
 [ママ]住ス 延文比鎌倉〔貞宗〕(貞宗ハ〔五郎正宗〕乃子也)之門ニ入テ傳授應安二[1369]年一説嘉慶二年[1388]
 トアリ 五月七日死追號實山一峯——信國〔虎熊入道〕 貞治頃[1362-67年]——信國初〔定國〕〔源左衛門〕
 後信國ト打。右信國三代京都ニ住——〔信國吉家〕德千代源姓ヲ賜 永享十二(1440)年庚申〔安智夢吉門〕(又
 安心院共)〔安智夢氏ノ家ハ其後天正[1573-91]頃カ、明治廿一年迄三百拾六年口、〔大友〕氏ノ爲ニ亡サルト云)之招ニ依
 テ豊前國ニ下リ安智夢ノ庄ニ居住比時吉門ヨリ一字ヲ授リテ吉家ト云銘ハ〔源信國吉家〕ト彫 是ヨリ代々信
 國ヲ以氏トス則宇佐信國ノ元祖也文安三[1446]年丙寅九月二十三日死 追號義山勇雪——信國 又八郎 京都ニ
 テ死 追號峯山——〔吉正〕九郎左衛門 寛正五[1464]年甲申九月一日死 追號白雪良山——〔吉種〕助右衛門
 長祿三[1459]年巳卯四月十三日死 追號鐵無心——〔吉包〕亦左衛門 追號一山 文龜之頃[1501-03]——〔吉勝〕
 助左衛門 追號雪山 永正之頃[1504-20]——〔吉成〕治郎左衛門 追號雪山 天文之頃[1532-54]——〔恆吉〕〔平
 左衛門〕 追號宗微 永祿之頃[1558-69]——〔吉秀〕亦左衛門 慶長之頃[1596-1614]——〔吉盛〕六郎左衛門 追
 號釋淨了居士 慶長十三[1608]年八月七日死 嘉摩郡推木村海圓寺良誓上座入地邑ニ結縁ス 京信國ハ五條防
 門[ママ]ニ住テ三代鍛治タリ四代目信國故有テ豊後宇佐ニ下リ安心院吉門ニ寄託セシカ吉門ニ寵過セラル名乗
 ノ一字賜リテ吉家ト号ス是宇佐信國ノ元祖也 九代〔安心院〕ニ仕フ吉門ハ天正比豊後〔大友〕ニ戦亡ヒ家絶
 ス 兄〔吉秀〕ハ宇佐ニテ郷士格タリ 第六郎左衛門〔吉盛〕流浪イタシ 暫ク筑前國早良郡福崎町柳原ト云
 所ニ居住其子此〔惣五郎〕後〔五左エ門〕ト名改 親吉盛引連同國嘉摩郡馬見村ニ住ス 夫ヨリ上座郡入地邑
 ニ居住ス 是ニ依テ柳原ヲ姓名トシテ 寛永元戊辰[1628]ノ年七月十日ニ死 是入地邑鍛冶信國元祖也——〔信
 國六郎左エ門兼〕美濃之國之住鍛〔六郎左エ門兼久〕娘故有リテ筑前之國ニ赴越處 〔信國平四郎吉政〕此婦
 人追々手ハザ鍛事傳 当ニ人業ヲ招鍛之畔杯ヲ尋タ處〔兼久〕カ娘ニ相違ナキ曲ニ 信國平四郎同國入地村
 弟エ見合タキ曲ヲ言入レ処 元來鍛之娘ニ付 六郎左エ門トハ同ク親之名ニ而之有之処 婦人モダイニ懇望之曲

也婦々ト成 丹誠ヲ抽出 情ヲ祓 其謂爰ニ記是信國之元祖也

〔信國吉助〕

御先祖様御内入之砌御城御用大祝左人数引連罷出候處 御城御用ヲ被蒙仰 御用相濟 御上御心御叶
比度粕谷郡役触頭被候付就而ハ当面役永代御除ケ可被為候事茲ニ記

寛永十七〔1640〕年申ノ二月六日 上座群入地村 惣五郎 同菱野村源兵衛〔等計9名〕

三木孫左衛門殿 羽生五良左衛門殿

右口書之通兩役仕迷惑之曲ニ候取次役ニ申付御郡役ハ引口口候以上 黒義作御判 小縫殿助御判

〔大音六左衛門〕殿

(中略)

(中略)

〔信國劔次郎〕

本史料は、山城から宇佐の〔信國吉秀〕までを〔信國六郎左衛門吉盛〕が記入し、命日等を相続者が記したと思われる、それら全体を明治廿一年(1888)〔信國劔次郎〕が書き留めたものである。「了戒—一国久—信國」と続く系譜は、万治四年(1661)に〔竹屋理安〕初版の『古今銘尽』であるが(小笠原信夫(1985)²⁰書誌)、寛永元年(1624)没の吉盛が記したのであれば、「竹屋理安本」の前である。しかし、信國初代の没年に紙を貼って「一説ニ」と修正しており、劔次郎が書留めた時に追加したのであれば、『古今銘尽』を参考にしたと思われる。

史料 3) 新藤一心斎義國記述「新藤家系図のこと」(略称「義國記」)(『岩手県郷土刀匠考』p.10 所収²¹書誌)

本史料は、〔信國平四郎吉政〕二代目の次男〔新藤次郎兵衛國義〕(延宝年間(1673-1681)に〔南部重信〕に江戸で抱えられ、盛岡へ移住(『南部藩参考諸系図』p.78)²²書誌にも系図あり))の末裔、〔新藤一心斎義國〕が明治に遠祖を語り、〔水原庄太郎〕氏が記録したもの。代々「源氏」を継承していた信國の「平家落武者」伝承の真偽を検証するため、ここに示す。

「新藤家系図のこと」

仰も我家の家名の儀は〔新藤左衛門〕と申者にして 〔平重盛〕十六将の一人に保元平治の大乱の時紫辰殿に於て〔悪源太義平〕に打破られ 平家亡落の後 某子孫京洛中洛外に隠居り名をば源の信國と改めて 刀鍛冶〔正宗〕老後の弟子と相成り近国にその名を顕わし又九州へ罷越えて筑紫の信國と申者数人に分かれて 筑前福岡に〔信國平四郎吉政〕と申す刀鍛冶あり 男三人にて兄〔平兵エ〕と云う。二男をば〔新藤治郎兵衛源國義〕と申て〔盛岡新藤〕の先祖成り。三男の〔三次郎〕は筑前福岡の親〔信國平四郎〕の家を継ぐ。依筑前信國平四郎吉政の次男新藤治郎兵衛國義は家職修行の為め江戸に罷出で神田明神前に於て修行中 〔重信〕公御代南部家に御抱に相成り 御切米二十駄二十人御扶持方高〆百石の永禄に御取立に相成 後々は士分の御奉公可致の御約束に有之候へ共 〔二代目義國〕の二男〔平四郎〕に更に御切米四駄二人扶持方被下置候上御老中次役に仰付 宝永七年〔1710〕六月十七日より永禄之士族にて御奉公を相勤め可や是則明治士族〔新藤七郎〕分家や然るところ 本家筑前福岡の住人信國平四郎吉政の長男〔平兵エ新藤信國〕は弟の國義盛岡の南部家御刀鍛冶御抱に相成候に付段々の御礼旁々生国筑前より兄の平兵衛御当所に参り候間しばし逗滞致度旨奉願候処兄平兵エ

儀は打物鍛冶則刀剣之細工仕候と申上候処然らば退屈凌ぎに何に成りとも得手細工を致し差上可申との御沙汰にて槍二本を打立御献上致候処至極上出来にて兄は兄丈の細工也逗中五人御扶持遣はし可申候間國義と同居致し相友に永く之家にむつまじく連名し此の平兵衛信國は名を《祖十代目信國》と切りし也、後には両家に分かれるとも先祖の石碑は唯一本の角石堂々として左右に國義信國兄弟の開名相印 右には國義 左には信國本国筑前と切付有るを見れば両家離れがたきしるしにや然るところ明治初年 兄の祖十代目信國の家は 北海道石狩国札幌を開墾の節屯田兵に相成りて移住せしが その後音信なし大先祖〔**信國**〕は〔**正宗**〕門人にして鎌倉時代源氏盛んなる頃にて**平氏の落武者**は地方に散乱して名々の職業を求めて依って大先祖新藤は平重盛の十六将の一人たると謂 **平氏の人故世を憚り正宗の弟子**に相成 京信國筑紫信國と申して筑前福岡に信國平四郎吉政は我先祖新藤國義新藤信國の父にして南部家御抱の節 大先祖の新藤を名乗らせしものなるべし(註 刀匠の記録として貴重なる文献であるため原文のまま記載した)

遠祖とされる〔新藤左衛門家泰〕、あるいは、〔新藤五国光〕、〔正宗〕、〔貞宗〕、〔長谷部国重〕との関係は後述する。

史料 4) 「吉田治年勤事之章.16」(『吉田家伝録』p.783-793 所収²³書誌)

〔徳川吉宗〕が享保四年(1719)『諸国鍛冶御改』(国立公文書館²⁴書影)にて諸国の鍛冶の刀を審査し、享保五年に〔主水正正清〕と〔一平安代〕、享保六年に信国助六こと〔**信国重包**〕と〔南紀重国〕を名人と認定し、「葵紋」を刀に打つことを許可した。本史料は当時の福岡藩家老〔**吉田治年**〕の日記で、享保十八年にその事情を詳細に記述し、〔大宰府天満宮〕から 1981 年に出版されている。系譜部分(p.791-792)と系図部分(p.792-793)があり、系図部分は信国助六重包・平四郎の提出分故に「助六記」として、史料 5)に記載する。また、重包の『諸国鍛冶御改』による「名人認定」の記事は本史料以外に「筑前国刀鍛冶信国助六江戸城に招かる」(『黒田新統家譜、卷二十一』「継高記」所収:²⁵書誌)、『長野日記、卷下』²⁶書誌)等にもあるが、ここでは系図関係のみを記す (p.789)。

〔前略〕同日(享保四年[1719]五月二十七日)晚御城ヨリ浜ノ御殿へ申来タリ候ハ、〔**京信国**〕ヨリ〔**助六**〕迄十五代ノ由申上候 其訳並ニ〔**吉次**〕・〔**吉包**〕ト申候ハ助六為メニ何ニテ候哉、早々申上ベキ旨ニ候由、〔山本六左衛門〕申聞ラレ候〔植木貞右衛門〕申上候ハ、吉次ハ助六ガ祖父、吉包ハ助六ガ親ニテ候 十五代ノ由ハ助六中考ニテシカト覚申サズ候 罷帰リ、トクト相考へ申上ベキ由申候へバ、急御用ト相聞へ候、其上先祖ノ儀儲ニ存ゼザルトモ申上難カルベク候 前後相違ノ分ハ苦シカラズ候間、助六覚候通書付差上ベキ旨六左衛門申サレ候ニ付、貞右衛門・助六申談シ、大抵書付差出シ候処、即御城へ差上ラレ候(此書付ノ控鍛冶記ニ見ヘズ)(中略)享保十三年[1728] 戊申ノ歳十二月十一日助六病死候ニ付(中略) 翌十四年己酉ノ歳三月、助六ニ下シ置カレ候切扶相違ナク倅〔**勘助**〕ニ下サレ、家業情ヲ出シ候様ニ仰渡サレ候(中略) 同十八年癸丑ノ歳七月信国勘助病死候ニ付、幼子〔**儀平**〕へ余人扶持下サレ、家業執行ノタメ町方支配仰付ラレ、成人ノ後家業御用ニ達シ候ハバ切扶返シ下サルベク候 此段、信国親族〔**信国弥九郎**〕へ申渡シ後見仕ベキ旨、月番〔**立花勘左衛門**〕町奉行へ申渡シ候 (中略)

史料 5) 「信国助六提出信国系図」(略称「助六記」)(吉田治年勤事之章.16『吉田家伝録』p.783-793 所収²⁷⁾書誌)

「信国系図」

p.792〔一代信国〕

延文年中[1356-60]京五条坊門ニ住ス 元来〔来国行〕伝ヲ受 後鎌倉〔貞宗〕伝受 初テ〔信国〕ト打

〔二代信国〕 後号〔虎熊入道〕

〔三代信国〕 号〔定国〕 後〔信国〕ト打 俗名〔源左衛門〕 右三代ハ京都ニ住ス

〔四代信国〕 〔徳千代〕 此時賜源姓〔源信国吉家〕ト打 其後豊前国宇佐郡〔安智夢吉門〕ニ属ス

〔信国〕 〔又八郎〕 京都ニテ早世

五代〔信国吉包〕ト打 —— 〔信国吉政〕ト打 —— 〔信国吉勝〕ト打 —— 〔信国吉成〕ト打

〔信国恒吉〕ト打後ニ吉次 —— 〔信国吉盛〕ト打 —— 〔信国吉秀〕ト打

〔信国吉貞〕ト打

其比信国家別テ数多アリ 然共家之伝授相続之家督之家ニ信国ノ国ノ字内左リ文字ニ銘ニ打セ申候 長政公豊前国御拝領之節 吉貞被召抱、其後御国御拝領之時節 御知行三百石可被下之由ニテ 妻子引越料米六拾石御拝領被為仰付 慶長五年〔ママ〕二月十一日彦山參詣ト申候テ豊前立退 御国罷越申候処ニ屋敷拝領仕候テ住居仕候

信国 勘助吉次ト打 —— 信国 助左衛門吉包ト打 今〔平四郎〕

信国 平四郎吉政ト打 —— 信国 平四郎吉政ト打 —— 信国 平四郎重宗ト打 —— 信国 平四郎重宗ト打

信国 孫四郎〔吉助〕ト打 —— 信国 作左衛門吉貞ト打 —— 信国 源市吉親ト打

信国 助六重包ト打 代々吉之字用來候処 光之様 御意ニテ重包ト被為仰付候 其後名乗ヲ除ケ申様ニト被仰付信国ト打申候

一 十三代吉次勘助^倅〔ママ〕平四郎、細工器用ニ御座候故、備前きたひ稽古ニ罷越別家之様ニ相成、御扶持方頂戴仕候故、助六惣領家之様ニ申候

信国助六

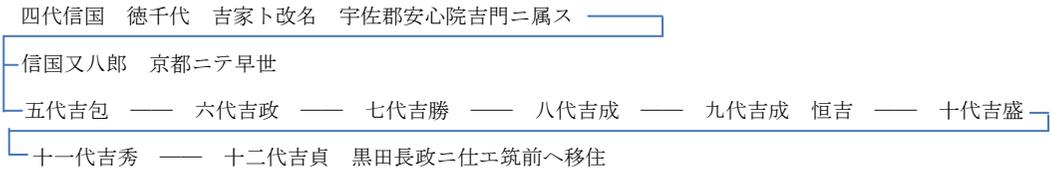
信国平四郎

私ニ云、此系図ハ助六・信国平四郎伝聞ヲ記シタルト見エ詳ナラズト言ヘドモ、鍛冶記ニ見ユルニ依テ此ニ写ス而已

本史料は史料 1)を継承しているが、史料 1)との違いは、〔来国行〕や〔貞宗〕との関連が記載されていること、〔吉包〕も〔平四郎〕と記されていること、〔吉田治年〕が『鍛冶記』で確認したことである。〔吉包〕も平四郎を名乗ったのであろう。しかし、「勘助^倅平四郎」は「勘助^兄平四郎」の誤記と思われる。

史料 6) 守次則定蔵「信国系図」(略称「守次信国系図」)(福永醉剣「筑紫了戒・信国考」続(『麗』所収)²⁸書誌)

本史料は、筑前に移住した守次則定氏所蔵の信国系図。福永醉剣氏が刀劍柴田の月刊誌『麗』に豊前時代を記載したもの。史料 2)「榊原信国系図」や後述する刀劍書と比較するため、ここに引用する。



史料 7) 貝原益軒編『筑前國統風土記. 卷 29: 土産考上』(略称「益軒記」)書影:福岡県立図書館¹⁴書影)

本史料は貝原益軒(1630-1714)が元禄元(1688)年に藩から編纂を許可され、[信国重包]在世時の元禄十六年(1703)に藩主に献上、宝永六年(1709)自序で、写本で流布された。明治 43(1910)年、益軒全集刊行会から刊行された。写本は福岡県立図書館から書影で公開された⁽¹⁴⁾書影。信国関連部分は「器用類刀」に記載される。

長政公入國の後、[信國]、[下坂] などいへる鍛冶を招て福岡にをらしめ、兵器を作らしめる。此信國は京信國か末裔也。故に代々信國を以て其家號とす。京信國は五條坊門に住て、三代鍛冶たり。四代の信國故有て豊前宇佐に下り、[安心院吉門]に寄託せしか、吉門に寵遇せられ、名乗の字をたまはりて[吉家]と號す。是宇佐信國の元祖也。九代安心院に仕ふ。然るに安心院は天正の初、豊後[大友]より攻亡されて家絶ぬ。ここに至て其時の[信國吉貞]も、流浪の身と成しか、[黒田高孝]公豊前を領し玉ひて後、信國を招て兵器を作らしめ、恩顧淺からざりき。[長政]公豊前より筑前へ移らんとし玉ひし時、信國吉貞をめして、我蹟を慕ひ筑前に來るへしとて、米穀を給はりぬ。慶長七年二月筑前に來りしかは、月俸を給り、居宅白銀を恵み、厚く遇せらる。吉貞男子三人あり。子孫今に至る迄三家に分かれて鍛冶たり。吉貞三流嫡家[吉次]、[吉包]、今[重包]に至る。吉次は次男なれとも、冶工の傳を受る故嫡家とす。[吉政]は嫡なれ共、備前に行て別傳を受故に、信國の嫡流とせず。其次又[吉政]今[重宗]に至る。吉貞か三男、[吉助]、[吉貞]、今[重貞]に至れり。(後略)

袋鑓 (注 12 のコマ 8 参照)、箭鏃 (注 12 のコマ 9 参照)

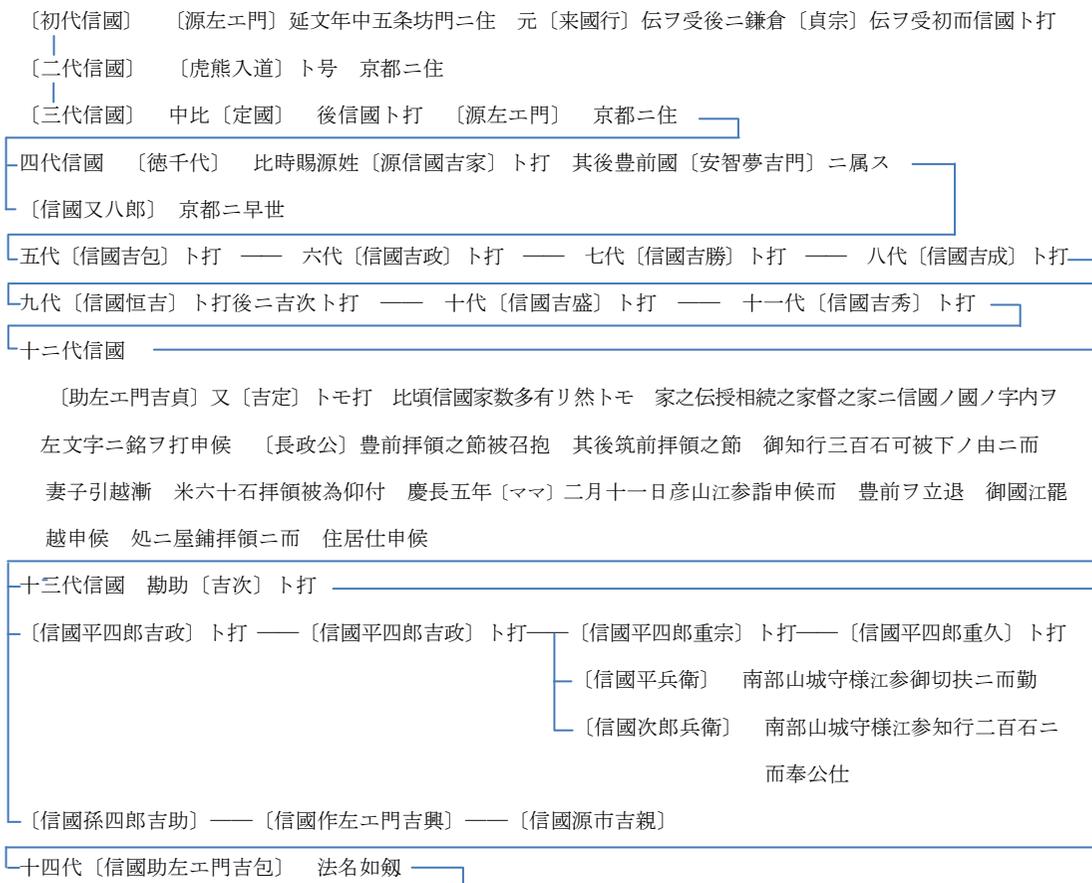
史料 8) 「信国藤五郎述信国系図」(略称「藤五郎記」)(『長政公御入国より二百年町家由緒記』略称『町家由緒記』p.33-38 所収²⁹⁾)

本史料は[黒田長政]が慶長五年(1600)に筑前入国より二百年(寛政十九年(1799))の祝いに、町奉行から次第有る者に書状を提出させたもの。{万町中}、十六[信国藤五郎]、十七「信国初ノ系図代々祖子付之事」、[信国平助]と続く。史料 5)「助六記」を継承し、詳細を補い、寛政十九年までを記述。史料 1)同様『福岡藩仰古秘笈』にあり、卷二十三にある(写真 3)。また、久野繁樹氏は「続筑前新刀の研究」(二)(『刀劍美術』65号(p.18-19)^{註 10)}に藤五郎の後裔[信国久米吉]所蔵系図の全文を記載している(文平、文作と記載しているが、又平、又作が正しい)。

目次 [中略] 十六 万町中 已上 十七 信國藤五郎 十八 信國平助 十九 鉄砲師 [中略] 目次終

十七 信國藤五郎

信國系圖



〔十四代〔信國助左エ門吉包〕 法名如劔 ————

〔十五代信國〕
 助六重包ト打 吉ノ字用來候処〔光之公〕御意ニ而重包ト被為仰付其後名乗ヲ除ク信國ト打申候様仰付之
 (中略) (中略)

四月 信國藤五郎

御町御役所

本史料は重包までの系図を継承している。藤五郎まで、惣領家、平四郎家、孫四郎家の後継や、藤五郎の出自をも記し提出しているが、別稿に記す。また、「信国平助述信国系図」（略称「平助記」）（『町家由緒記』）p.39-所収も別稿で述べる。

史料 9) 鷹取周成編『筑前国統風土記附録.卷四十七』土産考（略称「統風土記附録」という）上³⁰ (書影△)p.100-102 所収)

本史料は史料 7)益軒の『筑前国統風土記』を本編として、藩命により〔加藤一純〕に補遺を作成させ、〔鷹取周成〕, 1735-1807 が補助したもので、「土産考 上」は鷹取の編集である。益軒の記事の典

拋を採るため調査を行っていた。

器用類

刀 正應・西蓮・盛国・**信国**・下坂・則宗か遠孫等のこと皆本編に詳也。(中略)

・〔**信国**〕か事本編に詳也。今信国か家系を見るに、裏祖〔国吉〕は栗田口に住せり。六代目を信国といひ、假名を〔長谷部式部丞〕と號し、京五條坊門に居れり。**式部丞**より四代の信国(幼名**徳千代**後に〔**與左衛門**〕と称す。家系に詳なり)。〔**後花園帝**〕の御宇[永享元(1429)-12(1440)年]、御劔を鍛ひて献る。此時源姓を賜りしとそ。**永享十二[1440]年〔安心院吉門〕**か招にて豊前にくたり、〔**吉家**〕と改めしと云。此事本編にも見へたり。吉家より十一世孫〔**助左衛門吉定**〕は〔長政公〕に従ひ、文禄元年[1592]年朝鮮に渡り、彼國にて袋鑓を鍛へせ給ひしといふ。其子〔**平助吉貞**〕(後〔平四郎吉政〕と称せり。〔長政公〕の政の一字を賜ひしといふ)は、長政公の命に依て備前國に至り、〔**一文字助宗**〕か弟子となる。梁か傳と又〔**来國行**〕か傳、鎌倉〔**正宗**〕か傳とを合て三傳を一代鍛へりとそ。(後略。以降は「筑前信国を中心にして」で記す)

実見した家系図は記載されていないが、史料2)「柳原系図」に近い。しかし、徳千代に〔與左衛門〕名や、〔後花園帝〕に御劔を鍛え献上し、源姓を賜るなど、別系統の系図を見たと思われる。

以上で、信国記述、および、藩の記録を終える。山城信国や宇佐信国の過去帳は戦乱や移住により見当たらず、筑前信国は別稿に記す。

2.2 銘鑑、刀劍研究書、往来物

ここでは、信国関連で記載されている銘鑑、刀劍研究書を示す。関連刀匠は〔来〕(〔国吉〕—〔国行〕—〔国俊〕)—〔了戒〕—〔了久信〕—〔信国〕、〔鎌倉鍛冶〕(〔栗田口国宗〕—〔進藤五国光〕、〔正宗〕、〔貞宗〕)。

史料 10) 『銘尽』(通称『正和銘尽』)³¹ 書影

現存する最古の刀劍鑑定の写本(国指定重要文化財)で「国会デジコレ」所収。刀劍の茎の形状、銘、鑓目を図示・鑑定上の注記、系図を記載している。表紙には『刀劍鑑定之書：京都東寺子院觀智院取伝：応永三十年の古写』とあり、「本書正和五年著作 觀智院法印権僧正住室所脱 津田葛根蔵」と正和五年(1316)より数えて記述され、応永三十年(1424)の写本、觀智院所伝故に「正和銘尽」「觀智院本銘尽」ともいう。1316年活躍以前の刀匠を古代から記述している。以下、「書影」の注はリンク先で本文を見られたい。

史料 11) 『桂川地藏記』³² 書影

発見されている〔信国〕初出の往来物。応永二十三年(1416)十月十四日の条、コマ 12・13 に往古の鍛冶や当世に信国を載せている。

神息、(中略) 栗田口藤林 (中略) **国吉**、三條小鍛冶、天国、宗近、**来国俊**、國光、又法師鍛冶定秀、雲秀、**了戒**、備前國長光、(中略) 光長、鎌倉**新藤五**、**彦四郎**、**五郎入道**、九郎次郎、(中略) 後鳥羽院「十二月」番鍛冶等、亦当世作者**信国**、**々重**、達摩、有来、藤島、出雲鍛冶等也但此中有可刃缺而渋朽実也、(後略)

史料 12) 『長享銘尽』 33 書影

長享三年(1489)を起算の銘尽。永享二年(1430)豊前国下毛郡山田多志田村永住坊筆の『金剛峯楼一切
 瑜伽祇経』の紙背に記され、〔安田文庫〕原本〔帝国図書館〕の臨模本(昭和15年(1940)1月、麴池
 三吉が書写)。「国会デジコレ」所収。刀身、茎、銘、鑢目、彫物を図示・注記、系図を示す。『銘尽』
 より詳細に記載されている。

コマ 19: 〔信國〕二代アリ殊ハ**定國**ト打後ニハ信國ト打

史料 13) 『往昔抄』 34 書影△

永正十三年(1516)、美濃の齋藤元肅公利安の資料(茎を図示、銘を書写)を子の利匡が抄録し、平
 直滋に書写を許可。同十六年(1519)書写本を元和頃(1615-1623)転写したもの。日本美術刀剣保存協会
 1955年撮影刊行本。国会デジコレの図書館送信参加館限定利用が可能(以下「国会デジコレ参加館」
 と称す)。

コマ 15: ①銘〔**来國光**〕と茎図示、書入れ「目抜穴したニ打」、②銘: **信國**、茎図示、書入れ「祖父 貞治のこ
 ろ乃物なり」

コマ 16: 銘〔**信國**〕の茎図示 書入れ:「京 親」、書入れ:「京 孫」、銘〔**信國**〕の茎図示 書入れ:「祖父
 弟 源五郎」

山城では文明元年(1469)に〔**祥雲入道**〕の名があるものの、信國家は永享十二年(1446)には豊前に移
 住しており、山城信國三代説は永享以前の山城信國からの取材と思われる。

史料 14) 『光徳刀絵図集成』 35 書影△

〔**本阿弥光徳**〕が作成し文禄三年(1595)、〔毛利輝元〕に献上した『太閤御物刀絵図』や、金工の〔**埋
 忠寿齋**〕本や文禄四年の「大友本」、慶長五年(1600)の「転写本」がある。これらを照合し、〔帝室図
 書館〕(現国立国会図書館)の「大阪御腰帳」を加えた【刀絵図】。

コマ 25: 銘:〔**信國**〕の茎図、書入れ: 樋梵字銅色々□□直刃みた連やきは□之

銘:〔**源左衛門尉信國**〕下り龍、鉞形、上り龍、裏銘:「應永廿一年[1414]二月日」劍卷龍

史料 15) 『埋忠銘鑑』 36 書影△

慶長十年(1605)から貞応四年(1655)に〔**埋忠寿齋**〕が収録した約600の【押形】集。茎(鑢目、銘、
 尻の形)、彫物、時には刃文を図示し、形状説明、来歴、金具、代金等を記している。

コマ 85: ①銘: 永徳三年(1383)八月日了**戒**口作、②銘: 了戒国行作、③梵字(不動明王)に劍彫物、銘: 了戒、④銘:
 了戒、⑤銘:了戒真能、⑥銘:了戒

コマ 86: ①銘:平安城**信國** 裏銘:貞治二二年(四年 1365)三月日、②銘:**信國** 裏銘:應永二年(1395)八月日、③銘: **信
 國**、図形付き独鉗劍と蓮台、④銘: **信國**、彫物: 梵字(大日如来) 独鉗劍と蓮台、裏銘:天蓋・草の劍卷龍

コマ 87: ①銘: **信國**、彫物: 三鉗に護摩箸、蓮台、②銘: **信國**、③長銘: **源左衛門尉信國**(國字は左字)、裏銘:
 應永十五年八月日

②銘: **信國**(國字は左字)、裏銘: 應永十八年八月日

コマ 88: ①銘: 重國、②銘: 重國(信國子)(重國ハ中嶋来一流ト云、埋忠ハ信國ノ子ト記シアリ)、③長銘: 源左衛門尉信國(國字は左字)、裏銘: 應永二十一年(1414)二月

史料 16) 本阿彌光甫著『空中齋祕傳書』(羽阜隱史著『鑑刀集成:諸家秘説』国会デジコレコマ 86 所収)³⁷ 書影)

刀剣研磨鑑定家の〔本阿彌光甫〕(1601-1682)の著した刀工の鑑定集。写本を羽阜隱史が大正 2 年(1913)に編纂発行したものの国会デジコレ版。信國の銘の見極めはコマ 94 にある。

史料 17) 『雲智明集』³⁸ 書誌)

弘化三年(1846)、〔栗原信充〕編集、〔尾関善兵衛〕発行。〔本阿彌長根〕が〔仰木伊織〕の『古刀銘尽大全』(寛政四年(1792))の誤りが多いのを正すため『校正古刀銘鑑』を出版するが、本家より秘伝公開不可として、絶版を命じられた(佐藤幸彦(2007))³⁹ 書誌)。写本を尾関が購入し、『掌中古刀銘鑑』として発行。『雲智明集』は表紙のみで中身は『掌中古刀銘鑑』。秘伝は次の例のように区別されている。例:「當同然」、「短刀ニ直刃多キ物」、「短刀ニ五ノ目アル物」、「短刀ニ皆焼多キ物」、「煮アル物」、「正目肌」、「梵字勝手下ル物」、「入札之コタへ書」等々

「入札之コタへ書」の項: 建武信國 中嶋来 末左 末青江 貞治ノ信國

寶壽元年(私年号:1532)(中略) 信國小明の憲宗の成化の年号(1465)打しも我ハ後證に備ふ

山城國の項:〔了戒〕來國俊子 正応五年(1292)、永仁五年(1297)、元徳元年(1329)

〔久信〕山城國住人ト云々 作正和二年(1313)

〔信國〕信久同人 建武二年(1335)、延文三年(1358)

〔定國〕貞治

〔信光〕源左衛門尉至徳二年(1385)

〔信國〕定國同人 應永元年(1394)、應永廿三年(1416)

〔信貞〕信國子 應永十二年(1405)

〔信國〕信光同人 源左衛門尉 應永十五年(1408)

〔信國〕信貞同人 式部丞 應永十六年(1409) 源式部丞 永享三年(1431)

〔信國〕 長祿三年(1459) 作文正三年(1468)

史料 18) 『継平押形: 附・本阿彌光徳同光温押形集』⁴⁰ 書影)

享保二年(1717)〔徳川吉宗〕が刀工〔近江守継平〕に押形を許可されたもの、加えて〔本阿彌光徳〕押形、〔本阿彌光温〕押形を昭和三年(1928)に羽沢文庫がまとめて編集した押形集。信國はコマ 84,85,176,209 にある。

史料 19) 『土屋押形』上編⁴¹ 書影)

旗本〔土屋温直〕(1782-1852)が作成した押形を中央刀剣会が刀剣分野の区分に従い編集したもの。全 10 巻。信國はコマ 92-105,107 にある。年紀ある銘は以下の通り。

コマ 93: 銘: 信國 裏銘: 貞治五年八月日 | コマ 99: 銘: 信國(左字) 裏銘: 應永五年二月日 | コマ 100: 銘: 信

國 裏銘: 貞享三年八月日 | コマ 101: 銘: 信國 裏銘: 應安二年

資料 20) 本間薫山,石井昌国著『刀劍銘字大鑑:原拓土屋押形』^{42書誌)}

『土屋押形』を原拓として、詳細な解説を加え、刀工名の 50 音順配列による参考図書 10 巻物。信国は第 7 巻 43-92 頁に 49 振ある。

資料 21) 本間薫山校閲,石井昌国編著『日本刀銘鑑』(略称:銘鑑)^{43書誌)}

石井昌国氏が 30 年かけ 81 種の古伝書等や刀劍の経眼により、約 2 万 3 千名の刀工について調査した典拠付きの銘鑑。ここでは、京、豊前初期について以下に引用する。()内に典拠があるが正式名は注に記した。

○《山村住信国》《信国》山村。源五郎信国子、越後住(元龜)。はじめ定国また正信とうつという。応安[1368-74]。越後。(新刊・大全・類字・集録・備考・名集・校正・総覧)「年紀」応安二。(注) 作例あるも真否研究中。源五郎は初代信国の弟また子了一とある。また源五郎信国はのち越後に住すといひ、また了一源五郎は後に信国と打とある。(伊東巳代治旧蔵の正信があるがその年代は南北朝後期の作である。(薫山))

○《信国園城寺住》。信国。三代信国婿。はじめ信光とうつという。応永ころ[1394-1427]。近江。(光山・集録・備考・見出・校正・土屋・刀美) (注) 信国派は了戒の如く、「信国」を冠称として信国何某とうつ。ただしそれが銘文にあらわれるのは応永以後のようである。(中略)

◎《信国》 信国派の祖。了久信の子。信濃小路および堀川にすみ、正宗老後の弟子ともいう(大全)。祖父信国また建武信国と称す。初代。建武。山城。(能阿・長享・往昔・文明・弘治・永禄・元龜・光山・新刊・大全・備考・校正・見出・会誌・万歴・古刀・大鑑)「年紀」建武二(備考・校正・見出)。(注) 建武信国というが在銘の確例がない。『新刊秘伝書』は了戒—了久信—祖父信国—子信国—孫信国とするす。久信に徳治[1307]・延慶・正和[1312-17]の年紀があるので、祖父信国の建武[1334-36]はほぼあたりそうである。無銘伝信国脇指一重文。(板谷胤雄氏蔵の重文脇指を建武信国というが磨上無銘のためその当否は判然としない。また渡辺国雄氏蔵の重文脇指は延文信国よりやや時代色もあって上手であるが、やはり建武まではさかのぼらず、延文信国の初期作であろう。(薫山))

○《信国》信国。初代信国弟また子という。源五郎。文和[1352-55]ころ。山城。(元龜・類字・名集)注:初代信国の弟また子の年代を文和とするす。したがって初代信国の年代はそれをさかのぼるといふべきであろう。

◎《信国》信国。了戒久信孫。来光重および相州貞宗門(貞宗三哲)という。京五条坊門堀川にすみという。また信久とも称すという。二代。延文[1356-60]。山城。(能阿・長享・往昔・弘治・和朝・寛永・光山・大全・類字・集録・備考・校正・校正追・見出・会誌・刀研・新古・通観・近代・講座・随録・辞典・字典・総覧・図譜・古刀・刀美・全集・新講・重刀)「年紀」延文三、康安元、貞治二(中略)至徳二・三・四[1387]。(注) 『元龜元年目利書』に了戒孫、応安ころ[1368-74]とある。了戒には嘉元年紀[1303-05]もあるので延文までは約五十年の差である。したがってこの信国は初代同人といえないこともないがなお研究すべきであろう。なお応安以後の作は劣る、次代であろうか。太刀一、短刀二重文。短刀二重美。

◎《信国》信国。孫信国とよぶ。信国信久の弟ともいう(元龜)。また信国信幸同人ともいう。孫左衛門。三

代。嘉慶[1387-88]。山城。(元龜・埋忠・寛永・光山・新刊・大全・類字・集録・備考・見出・名集・土屋・会誌・刀研・刀歴・大集・随録・講座・古刀五刀美・銘刀・継平・重文・重刀)「年紀」信幸銘に至徳二年紀がある。嘉慶二、康応元・二。注:熊野速玉大社の金銀装飾鳥頸剣に「源信国 貞光 信清 信貞 貞次 康応二年三月日」の銘がある。信国一族の合作銘として貴重であるが、銘鑑にみえるのは信貞(式部丞信国)のみである。剣一重文。

◎《信国》三代信国子。信国信定。四代。応永。山城。(嘉吉・秘銘・埋忠・光山・大全・備考・本朝・校正・校正追・見出・土屋・会誌・愛剣・刀研・刀歴・新古・築地・もく・通観・随録・辞典・字典・講座・総覧・古刀・刀美・重刀)「年紀」明徳元・三、応永元・(中略)廿四。(注)信定二字の作例もある。源左衛門尉また式部丞信国とは別人のようである。

◎《源左衛門尉信国》信国。三代信国子。初銘信光。左衛門尉。法名順城という。応永。山城。(光徳・埋忠・光山・集録・校正・校正追・見出・継平・会誌・刀研・刀歴・大集・近代・講座・辞典・総覧・古刀・刀美・新講)「年紀」応永五・(中略)卅四。(注)源左衛門とよぶ。ただし源は源氏の意。彫物名手。応永信国の代表工。信光銘に至徳二年紀があり源左衛門尉信光ときっている。(順城銘のものは室町後期の作を経眼している。(薫山))。

◎《信国子信貞》《式部丞信国》《源式部丞信国》信国。三代信国子。信国信貞(校正)。応永。山城(光山・長谷川・備考・本朝・校正・校正追・見出・会誌・刀研・刀歴・新古・通観・講座・辞典・総覧・築地・刀美・古刀・新講・全集)「年紀」応永八・(中略)卅四、永享二・三・四。(注)熊野速玉大社の奉納剣(康応二)に信貞の銘があり、富士浅間神社に《源式部丞信国》銘の脇指が寄進されている。脇指一重文

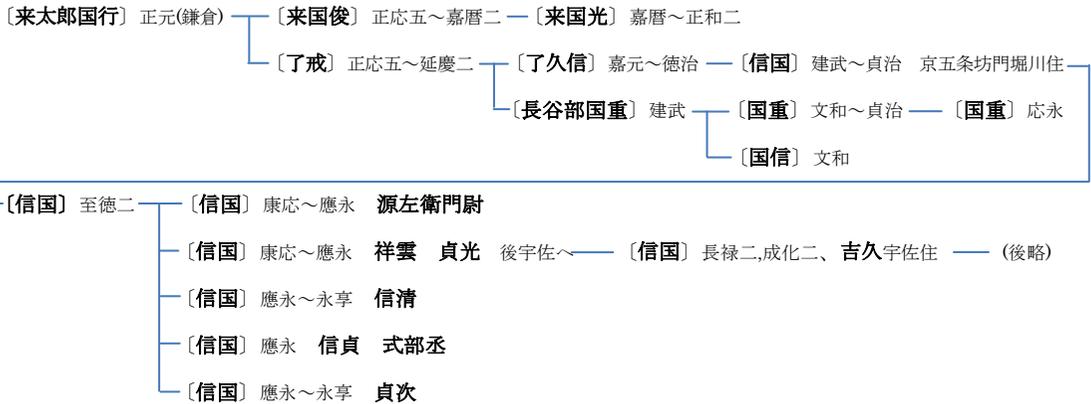
◎《信国》《信国祥雲入道》《信国祥雲入道生年六十七》永享ころ。山城(光山・大全・集録・備考・見出) (注)三代信国の子定光の法名というが、定光は貞光のようである(熊野社の剣銘)。

○《信国》《大和国信国》千手院。正和という。大和。(大全・集録・備考・見出・総覧)

◎《信国吉久》《信国》《豊前宇佐住信国》《宇佐信国》信国貞光子。京より筑紫へ下る。永享。豊前。(光山・大全・名集)「年紀」永享三。(注)筑紫信国という。信国派は了戒派とともにこのころから宇佐へ移行している。以下新刀期に及ぶ。なお備考、見出等にも信国の条に応永後筑紫へ下る、豊前宇佐定光後名とされている。したがって定光すなわち三代信国の子貞光が宇佐信国派の始祖ということになりそうである。

資料 22) 石井昌国氏記述「筑州信国吉政家系図」(略称「昌国記」) 44)

石井昌国氏が各種系譜、銘鑑、遺作群を調査し昭和五十八年一月に作成された信国吉政家系図(写真 4)。従って、[信国源五郎](建武信国弟)、宇佐信国の他系図等は省略されている。また、宇佐後期、筑前信国は別稿に記載する。



2.3 梵字彫物

刀匠や依頼主の信仰は梵字彫物に表出される。この分野の研究では伊藤満氏『刀剣にみる梵字彫物の研究』(略称:「伊藤梵字」)が詳細である。刀剣書に記載されている信国関係の法名等は次の通り。法師鍛冶了戒に学ぶ(五郎入道正宗の弟子長谷部国重は兄弟弟子か(「昌国記」))。貞宗から相州伝を受ける(新藤五国光法師(法名光心)→日光山法師大進房祐慶→五郎入道正宗、貞宗)〔初代信国〕法名〔清久〕(『古今鍛冶備考』⁴⁵ 書誌) | 〔二代信国〕虎熊入道(「吉貞記」ほか) | 〔三代信国〕祥雲入道(「銘鑑」) など京三代は「吉貞記」にあるよう、世俗を断ち修行した法師鍛冶であった可能性は高い。梵字や不動明王等の彫は信仰の証といえよう。次表は「伊藤梵字」を編集した種字別の表である。

	不 動 明 王	不 動 明 王 莊 嚴	胎 藏 界 大 日 如 來	金 剛 界 大 日 如 來	阿 彌 陀 如 來	葉 師 如 來	阿 閼 如 來	觀 世 音 菩 薩	十 一 面 觀 音	地 藏 菩 薩	金 剛 地 藏	馬 頭 觀 音	降 三 世 明 王	軍 荼 利 明 王	愛 染 明 王	毘 沙 門 天	摩 利 支 天	俱 利 伽 羅	三 鈷 柄 劍	素 劍 に 爪	旗 鉾	四 標	護 摩 著	護 摩 著 に 爪	梵 字 蓮 台 鉢 形	八 幡 大 菩 薩	天 照 皇 太 神	洗 間 大 菩 薩	不 動 明 王 像	愛 染 明 王 毛 彫						
来国行	◎				◎														○																	
国俊	◎																			○														○		
来国俊	◎																			○	○		○													
了戒	◎																			○	○															
新藤五国光	◎		○	○					○											○			○													
正宗	◎		○												○				○	○				○		○								○		
貞宗	◎	○			○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
初代信国	◎	○			○	○	○	○			○	○					○		○	○	○	○	○	○	○	○		○								
二代信国	◎	○			○	○					○	○					○		○	○	○	○	○	○	○											
室町期信国	◎	○			○	○	○	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○							
長谷部国重	◎	○			○							○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											

貞宗、信国が多くの種類を彫る。新藤五と正宗が胎藏界大日如来、貞宗、信国、長谷部が金剛界大日如来を彫っている。また、伊藤氏が p.162,212 ほかで指摘するように「天蓋、梵字（金剛界大日如来や不動明王）、蓮台、鋏形、素剣、蓮台」の意匠は、《陸奥新藤五国光》—《物吉貞宗》—《重文信国》へと継承されている。

2.4 銘字、鍛、鑢目、茎尻

銘は刀匠を識別する重要な要素である。例えば、信国の「國」字のクニガマエの中の縦棒の左右について、銘に特徴がある。一般的には左側が「三」「ミ」「彡」で右側が「う」や「彡」である。「吉貞記」にあるように、棟梁の家は「左字」即ち、《源左衛門尉信國》に見られるように左側が「う」の逆字、右側が「三」が家訓としている。この伝統は新藤五国光からきていと推察される（考察は後述）。彼は「國」字の左側が「乙」、右側が「彡」字であり、「光」字の上三画が「北」に近いので「左字北冠」と称される。

鍛、鑢目、茎について、佐藤寒山氏「山城鍛冶」⁴⁶書説には信国は次の如く記載されている。

「初、二代の短刀および脇指は平造、三つ棟が多く身幅の頃合いなものは短刀に多く、脇指は身幅が広く、わずかに反りつき、鍛は板目肌よく詰み、地沸（にえ）つき、地景入り、刃文は直刃を基調として小弯（のたれ）れ交じるものもあり、浅い小弯れにやや腰の開いた互の目交じるものなどが多く、よく小沸がついて砂流し金筋かかり、帽子はわずかに乱れ小丸に帰るなど、相州貞宗の伝統をついで、種々の彫物を重ねた、いわゆる重ね彫が見事である。大磨上げの太刀は鑢造で鋒がやや延びごころとなり、反りのやや高いもので、板目の鍛え、地沸つき、地景入り、小沸出来の小弯れに互の目を交えた出来があり、棒樋、二筋樋などを刻して、茎尻は栗尻が特に丸味を帯びたものである。短刀・脇指も茎は先が、やや細って栗尻がクルッと丸くなり、鑢目は切りわずかに勝手下がり、目釘孔の下、中央に信国と二字銘を切る。裏銘も同様に目釘孔の下、中央に切る。」

また、福永醉劍氏『日本刀鑑定必携』⁴⁷書説には、次の如く記載されている。

「太刀は希有。短刀や平造りの小脇差が多く、身幅広く先反り気味。彫刻を得意とし、素剣の頭がくびれるのが手癖。地鉄は山城風に小板目肌つまり地沸え出来で、相州風に大肌・地景がまじる。（中略）初代信国は相州貞宗三哲の一人で、彫物のある作には貞宗に化けたものがある。来国俊とみて素剣と護摩箸があれば信国と鑑定する。」

信国は来派の直刃と、相州伝の弯刃・砂流し・金筋の二様がある。「吉貞記」に「京〔了戒〕手ニ付鍛冶執行数十年心ヲツクシ」とあるように研鑽し信国と名乗った。重文伝貞宗《物吉貞宗》（『黎明会名刀図録』⁴⁸書影△）のように師と瓜二つの短刀（重文無銘信国（京都国立博物館蔵）⁴⁹書影）など写（模作）している⁵⁰。

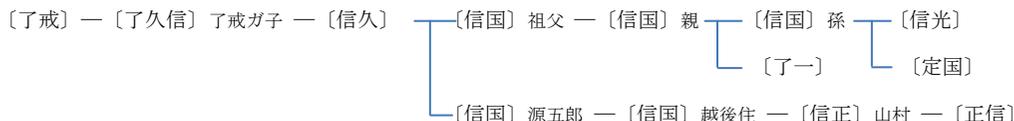
3 諸説

信国は黒田長政に仕えた関係で筑前時代の史料は残されているが、豊前時代は主安心院家が大夫に

滅ぼされ、山城時代は応仁の乱で史料は発見されていない。従って、山城信国については、在銘鑑定、刀剣書、関連史料で類推されている。山城信国を調べた小林種次氏「京信国の研究」⁵¹（書誌）は徳川以降の『校正古今鍛冶銘早見出』、『古今鍛冶備考』、『日本刀大鑑』、『新古刀大鑑』、『刀工総覧』、『日本刀伝習録』、『新刀古刀大鑑』、『日本古刀史』等を経眼した刀を含め比較し、銘と刀工の同定を模索している。また、小笠原信夫氏は「山城鍛冶了戒・信国考」（以下、「信国考小笠原」と略す）²⁰（書誌）で、室町時代からの諸書を実見により検討し、通説に批判を加えている。ここでは、「信国考小笠原」で問題点を整理する。

了戒：①在銘：正応三年(1290)~正和六年(1317)。②『正和銘尽』³¹（書誌）(1316)は「了久信と来久信は別」、③『尺素往来』⁵²（書影）(1414-25頃)までは来国俊と了戒を区別している、④『元龜元年万劍目利書』(1570)([来国俊]—〔了戒〕国俊十七才ノ時ノ子、,)が来と了戒を関連づけた近世以降の通説である、⑤『本朝鍛冶考』(1851)：「〔了戒〕は光重伏見御宇正安元徳・二字国俊子成奈良法師卜成」と『能阿弥本』の奈良法師説だが遅い年紀の作品発見で光重と了戒は別人である、⑥了戒の晩期は正和六年(1317)、その頃、子の了久信九郎左衛門尉は備前に移住(『正和銘尽』)、⑦了戒は京坂本住人で、元奈良鍛冶である、⑧延暦寺と関連ある法師鍛冶である、⑨刀工の系図は信用できない、⑩来系図に組み込むのは系図の権威化。

信国：①『元龜元年刀劍目利書』(1570)の系図が近世以降有力



②在銘：延文三年(1358)~貞治三年(1364),応安二年(1369),永徳(1381-83),至徳(1384-86),明德(1390-93),応永(1394-1427)

③『本朝鍛冶考』(1851):了久信の子、『古今銘尽(系図秘談抄)』(1611):了信久—久光—信久子信国、等々年代が不正確。

④『能阿弥銘尽』(最古本文亀頃 1501-03)「信国五条坊門堀河に住す 今に信国と打建武の比より二三代いづれも信国と打、『往昔抄』(1514)に「京祖父貞治のとり乃物なり」「京親」「京孫」「祖父弟弥五郎」とあり、信国三代説が定着している。

⑤『古今銘尽』慶長十六年(1611)に「鎌倉貞宗老後ノ時鍛冶稽古す 延文ノ比此作信久子と云相違也国久子也」とある、この頃より正宗をはじめとする相州伝の評価が非常に高まったことから、信国を貞宗に直結させる説が構築されていった。

⑥信国には鎌倉様式の作は存在しておらず、初代を建武まで測ってみることに疑問をもたざるを得ない。

⑦『能阿弥本銘尽』には「祖父信国と云は国の字の内を左字に打たるものあり」、『古今銘尽』は二代目が逆字だが、現存刀で南北朝期の逆字は見当たらない。

⑧延文のものを初代「祖父信国」にしても、それ以降至徳までの間に数種あつて伝書の記すところの年代に現存作刀を当て嵌めることは困難である。

- ⑨和歌山県熊野速玉神社には服飾調度類の一式として明徳元年(1390)に奉納された御神宝に金銅荘鳥頸太刀〔ママ〕(国宝)があり、中身は剣で銘に「**源信国 貞光 信清 信貞 貞次** 康応二年[1390]二月日」(現在所在不明)とある。一門に多数いた工房的性格の強い鍛冶。
- ⑩「目利」重視で作風類似により子弟、親子説を創り出す傾向が、来一門の了戒、了戒一信国であるが、了戒の嫡流としての信国は認めがたい。
- ⑪貞宗信国子弟説は江戸時代もかなり遅れて成立、正宗を中心とする相州伝の作風が非常に高く評価された時代に至って生れた説であることに、両者の結びつきが歴史事実とは無関係に創造された。

以上の説に対し、考察を加える

4 考察

刀剣書編纂者は刀匠に聞いて評伝する。同時代であれば真实性は若干増す。従って信国初代に関しては建武(1334-36)～応安頃(1368-74)の刀剣書に記載されていれば信頼性は高い。正和銘尽(1316)には、了戒、了久信までの記述はあるが、当然、信国はまだ記載されない。次に発見されている刀剣書は宇都宮三河入道の『上古秘談抄』であるが、福永酔剣氏『日本刀鑑定必携』⁴⁷書誌p.574によれば「『上古秘談抄』は三河入道が『名越遠江禅門本』を、応安二年に書写したものであるが、応永二年(1395)の誤記であろう。『円阿本』はそれを築刑部左衛門入道円阿が筆写したものである。これには中心のことは詳記されているが、刀工の時代や刃文のことは、一切述べられていない。」とあるように応永より後世で、入道が初代信国を取材した可能性はない(約180年後に鑑定した写本というスタンスで解釈する必要がある)⁵³。四代信国は「続風土記附録」によると永享十二年(1440)に宇佐に移住している。従って、応永信国が『桂川地蔵記』にあるような、中央の話題になったのは約150年後、秀吉の文禄の役(1593)、信国吉貞の話を黒田孝高・長政、細川忠興からと推測される。

さて、信国が「源姓で新藤氏」の矛盾をどう解釈するかが問題となる。「源氏」が「進藤氏」を僭称した例は『姓氏家系大辞典』⁵⁴書影にもある。即ち「清和源氏乙部氏族(中略)三左衛門に至り外家(近衛家臣進藤氏)の氏名を侵して進藤と云ふ」また、同書には「新堂 大和国の名族にして、長谷川党、法貴寺氏人の一」とある。「吉貞記」では〔源氏太夫〕、〔源左衛門〕である。「柳原系図」では〔源左衛門〕で〔長谷部式部丞〕、四代〔吉家〕が(刀工の官銘として)源氏を賜る、とある。「続風土記附録」では「後花園帝の御宇のうち(永享元1429)・12(1440)年、御劔を鍛ひて献る。此時源姓を賜りしとそ)。「助六記」では「信国正包一今平四郎。(長兄の系譜では)信国平四郎吉政ト打一信国平四郎吉政ト打一信国平四郎重宗ト打一信国平四郎重宗ト打」とある。そして、二代信国平四郎吉政の末裔新藤義国の「義国記」では「新藤左衛門」と申者にして平重盛十六将の一(中略)平治の大乱の時紫宸殿に於て悪源太義平に打破られ平家亡落の後某子孫京洛中洛外に隠居り名をば源の信国と改めて刀鍛冶正宗老後の弟子と相成り(中略)鎌倉時代源氏盛んなる頃にて平氏の落武者は(後略)」とある。

では、年紀等のある刀銘をしてみる。

- ① 1335年:建武二年(現存せず。『雲智明集』³⁸書誌)、

- ② 1358年: 短刀:銘「信國」裏銘「延文三年十二月日」(「信国考小笠原」図10²⁰書誌)、
- ③ 1361年: 短刀:銘「信國」裏銘「康安元年」(「信国考小笠原」図11)、
- ④ 1366年: 短刀:銘「信國」裏銘「貞治五年十月日」(「信国考小笠原」図12)、
- ⑤ 1383年: 太刀:銘「信國」裏銘「永徳三年八月一日」(「信国考小笠原」図13)、
- ⑥ 1387年: 太刀:銘「信國」裏銘「至徳四年二月」(「信国考小笠原」図14)、
- ⑦ 1390年: 太刀:銘「信國」裏銘「明徳元年八月」(「信国考小笠原」図15)、同:脇指(「信国考小笠原」図16)
- ⑧ 1414年: 小太刀:銘「源左衛門尉信國」裏銘「應永廿一年二月日」(「信国考小笠原」図17、『光徳刀絵図集成』書影35)
- ⑨ 1415年: 重文脇指:銘「富士浅間大菩薩 奉富士本宮源式部丞信國」ブログ「フジレキシ」2011年4月3日⁵⁵書影)裏銘「一期一腰 應永廿二年二月日」
- ⑩ 1427年: 太刀:銘「源左衛門尉信國」裏銘「應永廿二年二月日」(本間順治、石井昌国編『刀劍銘字大鑑』)p.316⁴²書誌)
- ⑪ 太刀:銘「伊勢天照大神 主平口秀」裏銘「八幡大菩薩 信國」(『刀劍銘字大鑑』p.304⁴²書誌)
- ⑫ 1535年:短刀:銘「平信國吉包作」裏銘「天文四年」(『刀劍銘字大鑑』p.1134⁴²書誌)
- ⑬ 1714年: 伊勢神宮奉納刀:銘「奉天照大神宮寄進 信國 山都宇田郡高松(高塚の誤伝か)庄者也 都出五条三代之後 西国下打之畢所 為子孫鍛之永奉奇之 平四郎 正徳四[1714]丁亥二月吉祥日」(福永酔剣『日本刀大百科事典』)p.157⁵⁶書誌)等。では、これらを含めて推論していく。

4.1 初代信国

「柳原系図」は京時代からの系図を浄書した形跡で、その伝承を素に、諸説を[]内に記載すると、次のようになる。〔國吉〕[粟田口也、先祖高麗(正和銘尽)]—〔來國行〕[是より来(正和銘尽)]—〔國俊〕[太刀銘《国俊》弘安元年(1278)(加島進 1980)]—〔來國俊〕[《来国俊》元応元年(1319)(加島進 1980)、《来源国俊》元応三年(1321)81才(本間・佐藤『日本刀講座古刀編(上)』p.58)、元亨元年(1321)までの銘、〔来孫太郎入道〕(正和銘尽)]—〔了戒〕[国俊弟子、元は奈良鍛冶(正和銘尽)、正応三年(1290)から正和六年(1317)までの銘(信国考小笠原)]—〔國久〕[来国久、了久信弟(正和銘尽)、正慶頃(1332)、「國久—信國」(古今銘尽)]—〔信國〕。

〔信國〕初代は〔長谷部式部丞〕で応安二年(1369)五月十四日没、法名〔清久〕。石井昌国氏ほか古来からの鑑刀家の銘鑑定を加味すると④短刀《貞治五年十月日》(1366)までが初代信国に比定されよう。「吉貞記」の「元応頃(1319)了戒手に付き」は、了戒最晩年作の二年後であり十分稽古できる年代である。通説のように〔了戒〕—〔了久信〕—〔信国〕は、もちろん不自然ではない。しかし、正和六年(1317)には了戒子〔了久信〕はすでに備前に移住しているので(『正和銘尽』)、京では現役を退いた

了戒に信国が修行していたと思われる。小笠原氏は「了戒の嫡流としての信国は認めがたい」とされる。しかし、「吉貞記」に「了戒手に付き」とあるよう、実子としてより、婿、または弟子としての記述が伺える。ここで重要なのは、氏が指摘される嫡流意識でなく、法師鍛冶の伝を受けたことである。「助六記」(1719)の「**来国行伝**を受け」は、元応頃鍛冶修行したので〔**来源国俊**〕(元応三年銘 1321)からも直接、伝を受けている可能性もある(「来国俊とみて素剣と護摩箸があれば信国と鑑定」(『日本刀鑑定必携』p.280)⁴⁷書誌)。

「長谷部式部丞」、「平信國吉包」銘、〔信国平四郎重宗〕の「生国は山都宇多」や「義国記」の伝承「大先祖は進藤左衛門家泰」が暗示するのは、大和宇陀長谷川党の新藤氏である。①太刀の「主平□秀」は「主長政 吉貞作」(『日本刀鑑定必携』p.543⁴⁷書誌)のように抱え主もしくは注文打ちと思われる。この〔平□秀〕は年代的地域的に、文保二年(1318)に真言宗総本山東寺の大和国平野殿庄へ送り文した惣追捕使(軍事検察官)〔**平清秀**〕が考えられる(『東寺百合文書』⁵⁷書影)。初代信国が修行後〔信國〕を名乗ってから、この太刀を打った可能性もある。では、初代信国新藤氏「源左衛門」の孫の「源左衛門尉信國」や、「源式部丞信國」、あるいは曾孫の源信国「徳千代源姓を賜る」の「源氏」は、初代信国の曾祖父(来源国俊)の「源氏」を名乗り、母方が新藤氏の可能性もある。あるいは、「義国記」の如く、父方が新藤氏で了戒(または、了久信)の婿として、母方が「源氏」の可能性が強い。

〔新藤五国光〕の子〔長谷部国重〕(銘：文和二二年(1355)本間順治『古刀鑑定編(中)』p.85⁵⁸書誌)は、〔正宗〕(新藤五国光の弟子)の弟子で鎌倉へ行き、相州伝を学んだ。ちなみに長谷部国重の弟または子に国信(銘：貞治二年(1365)『古刀鑑定編(中)』p.88⁵⁸書誌)がいるが、銘ぶり等から信国ではない。〔信國 | 新藤氏〕が長谷部国重同様長谷川党関係者で、新藤五国光長谷部の弟子の〔正宗〕(嘉暦頃 1326)、正宗の婿〔貞宗〕(建武頃 1334)に学んだなら、「天蓋、梵字、蓮台、鋏形、劍」の彫物や相州伝の継承は修験として必須となろう。〔貞宗〕との関連は貞宗に在銘作がなく、正宗と信国との関係で貞宗を鑑定している。そして、國字の左文字伝承や〔平〕姓(〔平信国吉包〕(天文四年[1535])の銘)、〔平〕名(信国〔平四郎〕吉政、〔平四郎〕吉包)の〔平〕は、先祖伝承〔新藤左衛門家泰〕のお館〔平重盛〕を顕彰して後代が名付けたことが考えられる。

4.2 二代信国

「吉貞記」に「後入道シテ法名〔虎熊入道〕ト號ス 刀脇指ニ法名アラハシタルハマレナリ」や筑紫信国は〔虎熊入道〕と伝承されるが、『往昔抄』^{書影31)}コマ 12 では〔平安城光長〕も《虎熊入道》を号している。「銘鑑」には延文(1356)から至徳(1384-86)頃までの諸説を記述し、「(応安) (1368-75)以後の作は劣る、次代であろうか」とも記す。「柳原系図」では貞治頃[1362-67]とあり、追号、命日は記されていない。「昌国記」では〈至徳〉(1384-86)。「信国考小笠原」p.13 では〈至徳〉(1384-86)から〈明德〉(1390-93)銘を同一視している。従って伝承や銘ぶりから二代信国〔虎熊入道〕は、貞治頃[1362-67年]から明德(1390-93)頃の作(國字の左が三、右がう)が該当すると思われる(得能一男『刀工大鑑』⁵⁹書誌)では建

武を初代、貞治を二代にしているので〔三代信国〕。

4.3 三代信国

三代信国について「吉貞記」は〔定國〕俗名〔源左エ門〕(應永)、「柳原系図」では、〔定國〕〔源左衛門〕〔長谷部式部丞〕、と記している。

「昌国記」では二代信国の子に〔源左衛門尉〕(康応~應永)、「祥雲」・〔貞光〕(康応~應永)のち宇佐住〔宇佐信國の祖〕、〔信清〕(應永)、「式部丞」(應永)を並列にしている。

川口陟著『刀工総覧』⁶⁰書誌では〔信国祥雲入道〕行年六十七、山城、文明頃[1469-86]。「銘鑑」では「〔信国信久の弟〕ともいう(元龜)。また〔信国信幸〕同人ともいう。孫左衛門。三代。嘉慶[1387-88]。山城。」を通説としている。

「信国考小笠原」では『元龜元年刀剣目利書』の〔親信国〕—〔孫信国〕(兄弟に〔了一〕)—〔信光〕(兄弟に〔定国〕)が有力説と紹介している。

『雲智明集』では、初代〔信國〕(信久同人建武二年[1335]延文三年[1358])を継ぐ二代に該当する〔定國〕(貞治、応永元年、廿三年[1416])と〔信光〕(《源左衛門尉》至徳二年[1385]、應永十五年[1408])、〔信貞〕(應永十二年[1405]《式部丞》應永十六年[1409]《源式部丞》永享三年[1431])を充てている。〔信貞〕(式部丞)の子(長祿三年[1459].文正三年[1468])がその後を継いでいる。

かように諸説があり推定は難しい。熊野速玉大社の金銀装飾鳥頸剣は「源信国 貞光 信清 信貞 貞次 康応二年[1390]三月日」は、「源信国(源左衛門尉か)、貞光(祥雲)、信清、信貞(源式部丞)、貞次」であろうか。《源左衛門尉信國》と《源式部丞信國》は銘が異なる。伝承の〔源左衛門〕の次男が宇佐初代であるので、「昌国記」にある貞光は源左衛門の子の可能性もある。

4.4 宇佐初期

「吉貞記」「柳原系図」とともに〔徳千代〕(〔源左衛門〕の次男)は、〔吉家〕を名乗る。活躍は「吉貞記」應永ノ比[1394-1427]、「柳原系図」では「文安三[1446]年九月二十三日死」である。二代目は「吉貞記」で〔源信國吉包〕法名〔勝是〕永享ノ比[1429-41]、三代目は〔信国吉政〕(寛正[1462]頃)。「柳原系図」では信國又八郎京都ニテ死追號峯山——三代目は〔吉正〕九郎左衛門 寛正五[1464]死、で一致している。宇佐初代吉家は、「昌国記」では〔貞光〕(〔祥雲入道〕(康応) [1389]・(應永) [1427]のち宇佐へ移住)が該当し、その子〔吉久〕(〔長祿〕[1458]宇佐住)が継ぐ。

京三代信国の系譜が若干不明であるが、以上で何故後代の信国が平家の落ち武者伝説があったか、父方もしくは母方の遠祖新藤左衛門家泰伝承と、同族と推定される新藤五、長谷部の法師鍛冶の系譜が若干解明されたと思う。

5 芸術情報学的資料収集、編集法

過去の事跡は原史料、資料が現代まで残され、翻刻、校訂、訳注、研究されていることが重要である。信国家は刀匠という特殊な家系で技術や作品が継承されている。史料についても、京、豊前時代は少ないが、黒田藩が明治まで続いたおかげで、後代が研究することができた。歴史史料すべてがデジタルアーカイブされると、研究はさらに進むであろう。本稿では調査に威力を持つデジタルアーカイブ化の一部を紹介する。

5.1 年号計算

「歴史家は元号の暗記は当然」と言われるが、初心者は次のようにすると便利である。

1) マクロ入り Excel Book (例 : n 信国銘.xlsm) にシート「年号」、「刀匠」、「典拠記事」、「親典拠」等を作る。

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	元号	西暦	年	求める西暦	干支	元号終年	改暦月日	ID
149	文保	1317	1	=VLOOKUP(A149,年号,2,FALSE)+B149-1←と書く		1319	4月28日	148
150	元応	1319	2	1320と表示される		1321	2月23日	149
151	元亨	1321	1	1321		1324	12月9日	150
◀ ▶		<u>年号</u>	<u>刀匠</u>			<u>典拠記事</u>		<u>親典拠</u>

シート「年号」には列「元号 | 西暦 | 干支 | 元号終年 | 改暦月日」を入れ、Ctrl キー + F キーで元号を探すと、西暦、改暦が分かる。列「求める西暦」には「=VLOOKUP(セルAのセル番号,年号,2,FALSE)+セルBのセル番号-1」と書いておく。上表を見よ。列「求める西暦」の内容をD列にコピーペーストしておく。列「年」に数値を入れると、列「求める西暦」に求める西暦が表示される。

2) シート「刀匠」のセルA1以下、1行目に以下の列を作る。

① A1 元号 | B1 年 | C1 =VLOOKUP(A1,年号,2,FALSE) | D1 =SUM(B1+C1-1) | E1 刀匠ID | F1 刀匠名 | G1 種別 | H1 銘 | I1 裏銘 | J1 彫 | K1 鑓目 | L1 尻 | M1 法量 | N1 形状 | O1 鍛 | P1 刃文 | Q1 銘字 | R1 評価 | S1 過去帳等書入れ | T1 来歴 | U1 活躍地 | V1 解説 | W1 系統 | X1 銘よみ | Y1 典拠1 | Z1 典拠2 | AA1 典拠3等々

② 2行目以降にデータを入れる。C2,D2以下、C列、D列にはC1,D1をコピーし、貼り付けておく(Ctrl+C キー, Ctrl+V キー)。

例:A2:応永 | B2:1 | C2: (コピーされた=VLOOKUP(A2,年号,2,FALSE))に「応永 21 年」の 21 を入れると 1394 (シート「年号」の列「年」)と表示される | D2: (コピーされた=SUM(B2+C2-1)つまり計算式 | 自動的に「求める 1414」が表示される) | E2: msen001 | F2: 源左衛門尉 信国 | G2: 短刀 | H2: 應永廿一年二月日 | I2: 源左衛門尉 信国 | J2: 表: 櫃内に真の俱利迦羅龍、裏: 真の上り俱利迦羅龍、宝珠、下り俱利迦羅龍、裏: | K2: 右手下り | L2: 浅い栗尻 | M2: 刃長:一尺九寸、反り:五分、元幅:九分五厘、先幅:六分五厘、元重ね: 二分五

厘、先重ね：一分五厘、中心長さ：四寸四分 | N2: 鑄造り、庵棟、先反り心、中切先 | O2: 小板目つむ | P2: 直刃に小乱れ交じり小沸えつき、物打ちより上は広直刃、横手下は特に広い（中略）説明：『黎明会図録』p52 より | Q2: 左字、う逆 | R2: 名物松浦信国 | S2: | T2: 名物帳追加の部を見ると「松浦信国、長さ二尺一寸九分、是を上り竜（中略）説明：『黎明会図録』p52 より | U2: 京 | V2: 近藤周平、吉川賢太郎『黎明会名刀図録』によると、「名物帳」に記載され、（中略）」と記載されている。（後略） | W2: 山城信国、古刀 | X2: みなもの さえものじょう のぶくに | Y2: 近藤周平、吉川賢太郎『黎明会名刀図録』（←これはシート **典拠記事** にハイパーリンクする）

3) シート **典拠記事** は「国会デジコレ」等のデジタル典拠、冊子体の図書や論文の書誌を入れる。

まず、購入した冊子体の図書や論文はスキャンし、書影を PDF にして典拠を集めたフォルダ（例：刀銘）に次のような名前を付けて保存する。例：k 近藤吉川黎明会図録.pdf。頭文字に姓名の半角アルファベットを入れるのは、検索の便のため（k と入れるとすぐ表示される）。列は次のようにする。

A1: 記事 ID | B1: 簡略名 | C1: 記事タイトル | D1: 記事著者 | E1: 全文アドレス | F1: 親書誌 ID | G1: 親書誌タイトル | H1: 親著者 | I1: 出版事項 | J1: 巻号頁 | K1: 簡解 | L1: 利用場面 | M1: 親著者 ID | N1: 刀銘 ID | O1: 刀名 | P1: 刀匠 ID | Q1: 刀匠名 | R1: 書影ファイル名

セル A2 以降、2 行目は次のような値を入力する。

A2: 4mbmu001 | B2: 名物松浦信国近藤 | C2: 脇指源左衛門尉信国(名物松浦信国) | D2: 近藤周平, 吉川賢太郎 | E2: http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8799586 | F2: 8rmkz001 | G2: 黎明会名刀図録 | H2: 近藤周平, 吉川賢太郎 | I2: 東京：日本刀剣保存協会, 1960 | J2: コマ 52 | K2: | L2: 刀匠信国派 | M2: 2kdsh001 | N2: 1gsem001 | O2: 脇指源左衛門尉信国 | P2: 2nkg001 | Q2: 信国源左衛門尉 | R2: k 近藤吉川黎明会図録.pdf

以上のような、テーブルを作り、F2,M2,N2,P2,R2 などをそれぞれのファイルにハイパーリンクしておく。デジタル化は検索が格段に便利となり、Web 頁ともリンクするので、検証するのによい。筆者は老眼で小さな字の冊子体はほとんど読みづらくなってきた。デジタル化することで拡大も可能であり、推奨できる。

最後に、史料収集に尽力された故福田裕、故八尾敏則氏、家系図を提供くださった信國国利氏、故石井昌国先生、さらに、翻刻に尽力くださった跡見学園女子大学の泉雅博先生、諸般にご教示くださった国士舘大学の藤森馨先生に感謝申し上げます。また、古来の鑑定家、小林種次氏、小笠原信夫氏等先達にも感謝し、本稿を終える。

写真 1) 「吉貞記」

和子信康九刀船指考也其義此日記
 其長安年三月廿八日 信國船大能
 吉貞記
 其後安年八月十七日 信國無事

一 天長ノ此 師者ニ 派成ノ文ト 吉公系有リ 吉貞記
 信國 初美周代ノ 信國ト云
 信國 初美周代ノ 信國ト云

写真 2) 「柳原系図」

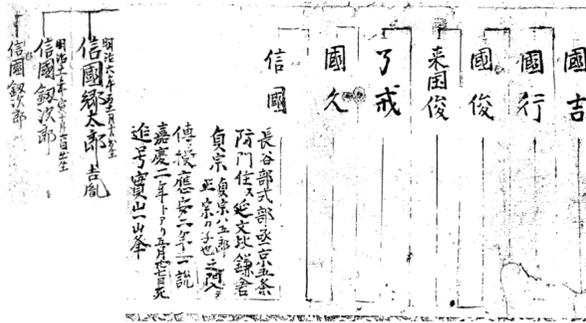


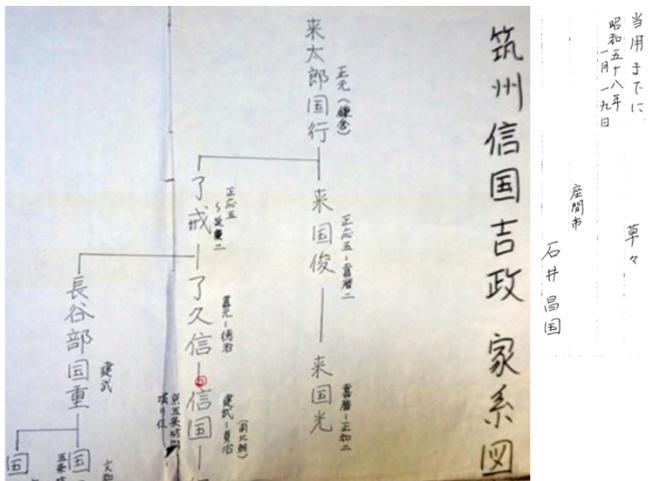
写真 3) 「藤五郎記」

今度 若君様へ進上之鑑之柄、青貝の貝貳拾貫上ケル
 五月六日 長政
 南田中

十七 信國藤五郎

初代信國 源五郎延文二年中五茶防門住元木園行依り長政ニ
 長政家依り長初而信國ト云
 二 代信國 長政無入道ノ号景都ト住
 三 代信國 中比定國
 源五郎延文

写真 4) 「昌国記」



- 1 **【国立国会図書館デジタルコレクション】**(以下「国会デジコレ」と略す): <http://dl.ndl.go.jp/> (国立国会図書館)では2002年からインターネット公開していたデジタルアーカイブ【近代デジタルライブラリー】(略称「近デジ」)があった。サイトリニューアルやサービス拡大で2011年に【国立国会図書館デジタル化資料】を公開、2014年に「国立国会図書館デジタルコレクション」と改称し、2016年に「近デジ」を廃止し、「国会デジコレ」に統合。著作権の切れた資料をインターネット公開するが、著作権の関係で特定図書館へもサービスする「図書館送信資料」、国会内限定の「国立国会図書館内限定」サービスがある。
- 2 文化庁編**【国指定文化財データベース】**http://kunikishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.html 1997年から文化庁が公開している。「文化財保護法」に基づき、国が指定・登録・選定した文化財等の情報を、「名称」、「分類」、「都道府県」、「指定等区分」、「所有者」、「時代」、「地図」等で検索できるサービス。
- 3 [Internet Archive] のデジタル Web アーカイブ。**【WayBack Machine】**: <https://archive.org/>
- 4 【ハーバード方式】: 論文中に著者の姓(出版年)と書き、参考文献を巻末に記入する方式。ここでは姓名(出版年)を記入し脚注番号で巻末参照にリンクを飛ばす。
- 5 【鍛え】(きたえ)と【地肌】。鋼を鍛錬する材質や手法でできた地がねをいう。材質には【玉鋼】や【南蛮鉄】などがある。代表的な地肌には【板目肌】、【杓目肌】、【梨子地肌】、【柁目肌】、【綾杉肌】などがある。
- 6 【刃文】福永酔剣『日本刀鑑定必携』<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN09425310>には「刀のここが刃だ、と「ノ」のところに点を打ったもの」とある。形状で【直刃】(すぐは)、【弯れ刃】(のたれは)、【丁字刃】、【五の目刃】、【鋸刃】、【小乱れ刃】、【大乱れ刃】、【逆乱れ刃】、【皆焼刃】(ひたつらは)、【菊水刃】、【桜川刃】、【富士見西行】などを示している。
- 7 【茎】(中心、なかご)刀を持つ柄(え)に入る部分(区(まち)から下の茎尻まで)で、制作年月や作者名などの【銘】、【鑢目】(やすりめ)と【目釘孔】(めくぎあな)が施されている。形状には、普通のもの、【雉子股】、【タナゴ腹】、【タナゴ腹強きもの】、【振袖】、【尻張】、茎尻には【剣形】、【刃上がり栗尻】、【栗尻】、【切】などがある。刀匠制作のままを【生茎】(うぶなかご)、茎尻から切ったものには【磨上茎】(すりあげ: 銘は残る)、【大磨上げ】(銘も残らない)という。
- 8 【銘】: 刀の茎に刀匠名等を【銘切り鑿】(たがね)を叩いて刻む。大宝元年(701)制定した『大宝令』の「宮繕令」(窪美昌保著『大宝令新解』第三冊(国立国会図書館デジタルコレクション(以下「国会デジコレ」と略す) コマ78 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/926859>)に「凡宮造軍器 皆須依様 今鑢題年月及工匠姓名 若有不可鑢題者 不用此令」とある。すなわち、「軍器を作るにはすべて恰好によるべし、題名年月、工匠の姓名を彫れ、若し、題名が彫られてなければ、この令を用いていない(偽物である)」。
- 9 【鑢目】(やすりめ): 刀の柄木から茎が落ちぬよう、ヤスリで刻む。現存最古の【刀剣鑑定書】『正和銘尽』(注は後述: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288371>)にも描かれている。
- 10 【刀剣押形】: 刀剣鑑定の為、【刃文】や茎の形状、銘の字形を描く【刀絵図】から始まった(『正和銘尽』(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288371> コマ6-13)では茎の形状、銘、鑢目を描いている)。享保二年(1717)、近江守〔藤原継平〕は〔徳川吉宗〕の許可を得「エガタ」を写した。こちらは羽沢文庫が編集し『継平押形: 附・本阿弥光徳同光温押形集』として〔本阿弥光徳〕(1556-1619)、〔本阿弥光温〕(1603-67)の押形をも含め、名匠64工のエガタ集を昭和二年(1927)に公刊している(<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1190999>)。幕末には刀の上に和紙をあて、石華墨で茎部分をこする。天保十一年(1840)・嘉永元年(1848)頃の『刀剣押形続編』(国会デジコレ: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2553023?tocOpened=1> コマ3 山田「天保十一子年大小類控帳」の書影)。
- 11 「信國初系図代々祖子付之事」(略称「信国吉貞家伝」)『福岡藩仰古秘笈 卷二五』所収(福岡県立図書館蔵)

- 12 久野繁樹著「**統筑前新刀の研究**」(『**刀剣美術**』64号, 1960所収) 所蔵館: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/AN00372512>
- 13 **大分放送**「龍王城(りゅうおうじょう) 宇佐大宮司安心院氏の山城」(旧 Web 版『**大分歴史事典**』所収) <https://web.archive.org/web/20011123210729/http://www.e-obs.com/rekisi/rekisi.htm>
- 14 **貝原益軒**編竹田定直校訂『**筑前国統風土記 卷二十九 土産考上**』(福岡県立図書館郷土資料室デジタルコレクション所収) 書影: <http://www.lib.pref.fukuoka.jp/hp/gallery/H25/PDF/fudoki29.pdf> コマ 5-7。
- 15 **長野誠**編「**綜合福岡藩年表**」(『福岡県史資料. 第2輯』福岡県, 1932-35所収。国会デジコレ:コマ 100) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1213852/98?viewMode=>
- 16 西日本文化協会編纂『**福岡藩.文化**』(『福岡県史』通史編.(下)所収) 所蔵館: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN09703220>
- 17 「**細川忠興軍功記**」(近藤瓶城編『**史籍集覧**』第15冊、国会デジコレ 1920302, コマ 57所収) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920302/50?viewMode=>
- 18 「**柳原信国系図**」信国劍次郎写、信国国利氏蔵、本稿が初出。「信国柳原祖先之碑」については福永酔劍著「了戒・信国考」(銀座刀剣柴田月刊誌『麗』207, 1991, p.6)に一部記載がある。
- 19 追号は普通、国替え、宗旨替えて菩提寺を変更した場合付けられる。すべてに追号がある故、筑前移住に伴い付けたとされる。
- 20 小笠原信夫「**山城鍛冶了戒・信国考**」(『東京国立博物館研究誌』409,p4-17, 1985-04) 書誌: <http://ci.nii.ac.jp/naid/40000022154> p.12
- 21 水原庄太郎『**岩手県郷土刀匠考**』(岩手県郷土刀匠考刊行会, p.14, 1974) 書誌: <http://iss.ndl.go.jp/books/R100000001-I036212669-00>
- 22 [星川正甫原編]; 前沢隆重他編『**南部藩参考諸家系図**』**巻5 国書刊行会**, 1985, p.230 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01175989>
- 23 「**信国助六述信国系図**」(吉田治年勤事之章.16 『**吉田家伝録**』所収) 大宰府天満宮, 1981.9 所蔵館: 筑波大学附属図書館等 <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/> CiNii: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01902041>
- 24 「**享保諸国鍛冶御改**」<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F1000000000000033697> (国立公文書館デジタルアーカイブ)
- 25 「筑前国刀鍛冶信国助六江戸城に招かる」(『**黒田新統家譜.巻二十一**』「継高記.二」(出版者,出版地不明): 校訂本: 福岡古文書を読む会,川添昭二校訂『**新訂黒田家譜.巻四**』, 文献出版, 1982, p.52-54)所蔵館: 筑波大学附属図書館 <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimedia/search/book.do?nqid=9&mode=comp&database=local&searchTarget=BK&nqid=9&queryid=2&position=1&bibid=204062&detailCategory=book> で「黒田 家譜」検索
- 26 『**長野日記. 巻下**』(秀村選三編『近世福岡博多史料第一集』.- 福岡市: 西日本文化協会発行, 1981. 所収) p.222-224 <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN00338261>
- 27 「**信国助六述信国系図**」(吉田治年勤事之章.16 『**吉田家伝録**』所収) 大宰府天満宮, 1981.9 所蔵館: 筑波大学附属図書館等 <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/> CiNii: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01902041>
- 28 守次則定氏蔵「**信国系図**」(福永酔劍「筑紫了戒・信国考」続(刀剣柴田月刊誌『麗』no.297, p.6, 1990所収)
- 29 「**信国藤五郎述信国系図**」(略称「藤五郎記」)(『長政公御入国』二百年町家由緒記』略称『町家由緒記』所収) 福岡県立図書館 昭和 38 年 12 月 24 日受入れ 51953.
- 30 鷹取周成(ちかしげ)編『**筑前国統風土記附録.巻四十七**』**土産考 上**(国会デジコレ参加館書影)

- <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2500149/11?viewMode>
- 31 『銘尽』(通称『正和銘尽』、国会デジコレ) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288371>
- 32 『桂川地蔵記』略称:「地蔵記」(尊経閣叢刊「国会デジコレ」コマ12,13所収)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1187252>
- 33 『長享銘尽』(国会デジコレ2539344 コマ19) 書影: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539344>
- 34 『往昔抄』(日本美術刀剣保存協会,1955) 書影(国会デジコレ参加館):
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2483063>
 永正十三年(1516)、美濃の齋藤利匡が父の原本を抄録、平直滋が同十六年(1519)書写し、元和頃(1615-1623)転写した版の書影。本稿の書誌解説は間宮光治「往昔抄についての一考察」(『歴史と刀剣』419号書影:国会デジコレ、コマ26-28(国会デジコレ参加館): <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/7901113> を要約。
- 35 『光徳刀絵図集成』(国会デジコレ参加館): <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1184136> [本阿弥光悦]の[本阿弥光徳]が文禄三年(1595)、[毛利輝元]にも献上した「毛利本」、埋忠寿斎の「埋忠本」、文禄四年の「大友本」、慶長五年(1600)の「転写本」を照合した名物刀絵図。詳細書誌解説はコマ111-114にある。
- 36 『埋忠銘鑑』(国会デジコレ送信参加館): <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2518243> コマ31-38に書誌解説がある。
- 37 本阿弥光甫著『空中齋秘傳書』(羽臯隠史著『鑑刀集成:諸家秘説』) 書影:
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/951154>
- 38 『雲智明集』(『掌中古刀銘鑑』江戸:須原屋茂兵衛,弘化3[1846]所収) 書誌:
<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimedio/search/search.do?mode=simp&keyword=%E6%8E%8C%E4%B8%AD%E5%8F%A4%E5%88%80%E9%8A%98%E9%91%91> 筑波大学中央図書館蔵 見返しの書名は雲智明集、序には『掌中古刀銘鑑』、別名『鑑定秘事録』、刊記に弘化三丙午とある。幕末の栗原信充が編集。「『国書総目録補訂版』(岩波書店,1989-1991)では、尾関永富『古刀銘鑑』とある」と同大学の書誌記述がある。
- 39 佐藤幸彦「校正古刀銘鑑発禁の謎」(『日本刀研究:佐藤幸彦刀剣論文集』2007所収) 書誌:
<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA82419942>
- 40 『継平押形:附・本阿弥光徳同光温押形集』(羽澤文庫編,1928 国会デジコレ1190999所収) 書影:
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1190999> 享保二年(1717)。
- 41 土屋温直,中央刀剣会編著『土屋押形』上編: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1266631> , 下編: 嘉永五年(1852)以前収集、中央刀剣会,1926。国会デジコレ1266631 書影。
- 42 本間薫山校閱,石井昌国編著『刀剣銘字大鑑:原拓土屋押形』: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN07172939>
- 43 本間薫山校閱,石井昌国編著『日本刀銘鑑』: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN11708577> 古伝書等:『愛剣』,『今村押形』,『永禄銘尽』,『往昔抄』,『大分郷土刀鍛冶銘鑑』,『大坂新刀年譜』,『刀の研究』,『観智院銘尽』,『鑑刀随録』,『木屋流目利秘伝書』,『慶長銘鑑』,『元亀元年目利書』,『光山押形』,『弘治銘尽』,『校正古刀銘鑑』,『校正古刀銘鑑追録』,『光徳刀絵図』,『古今鍛冶備考』,『古今鍛冶名集録』,『古今鍛冶銘早見出』,『古今剣工銘尽』,『古今銘尽』,『古今類字銘尽』,『古刀銘集録』,『古刀銘尽大全』,『古銘刀中心形』,『御物東博銘刀押形』,『薩摩の刀と鐔』,『主要刀剣展等図録』,『春霞刀苑』,『正銘秘伝』,『新刀押象集』,『新刊秘伝書』,『新々刀大鑑』,『新刀鍛冶綱領』,『新刀古刀大鑑』,『新刀弁疑』,『新刀銘集録』,『新刀銘尽後集』,『新刀銘尽』,『新版日本刀講座』,『長享銘尽』,『築地刀剣会押形』,『土屋押形』,『鉄舟』,『刀苑』,

- 『刀華会講話』、『刀剣会誌』、『刀剣趣味』、『刀剣春秋』、『刀剣史料』、『刀剣と歴史』、『刀剣美術』、『刀剣銘字典』、『刀剣銘大集』、『刀工総覧』、『日本刀講座』、『日本刀工辞典』、『日本刀辞典』、『日本刀全集』、『日本刀大鑑』、『日本刀通観』、『日本刀の近代的研究』、『日本古刀史』、『能阿弥銘尽』、『濃州刀銘鑑』、『長谷川忠右衛門家伝書』、『刃文と銘字』、『秘伝銘録聞書』、『本阿弥代付鍛冶系図』、『本阿弥光瑳押形』、『本朝鍛冶考』、『埋忠押形集』、『銘尽秘伝書』、『目利書国々国入』、『もくろく』、『山田浅右衛門刀剣押形』、『陸軍受命刀匠名簿』、『和朝古今鍛冶之次第』、『蔵手刀』。
- 44 石井昌国記「筑州信国吉政家系図」、1983：筆者蔵 写真3, 写真4 信国平四郎吉政家系を主に調査結果を記した一枚物。
- 45 『古今鍛冶備考』(小林種次「京信国の研究(一)」(『刀剣美術』)No. p.23 所収)所蔵館：
<http://ci.nii.ac.jp/ncid/AN00372512>
- 46 佐藤寒山「山城鍛冶」(『日本の美術』107, 1975 所収) 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/naid/40003010368>
- 47 福永酔剣『日本刀鑑定必携』2版, 雄山閣出版,1993,p.280 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA81921442>
- 48 近藤周平,吉川賢太郎共編『黎明会名刀図録』(国会デジコレ参加館 8799586) 書影：
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8799586>
- 49 《重文短刀無銘信国》(京都国立博物館蔵) 国指定文化財等データベース影像
<http://kunishitei.bunka.go.jp/bssystem/index-pc.html> で「信国」検索
- 50 本刀は重文短刀銘「信国」(東京個人蔵)と瓜二つで信国と鑑定されている。物吉貞宗は銘消しの痕跡が見られるが、尻は貞信の剣形と異なり信国の浅い栗尻である。しかし「天蓋、梵字、蓮台、鍔形」のWの内側がすっとしている貞宗、若干曲がる信国との違いはある。
- 51 小林種次「京信国の研究」(『刀剣美術』(一)～(四)) 所蔵：<http://ci.nii.ac.jp/ncid/AN00372512> 国学院大、東京藝大等
- 52 『尺素往来』(国会デジコレ『群書類聚』第186-188,2559131 コマ11 所収)
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2559131>
- 53 福永酔剣氏は『偽名刀の研究』p.18に、永禄五年(1558)『三好下野入道口伝』の異本を引用し「信国 鎌倉物を似せて打たる多し」の解釈に「似せ」作を示唆しているが、同じく、p.20では文禄頃(1592)『新刊秘伝抄』での「写し」作を記している。
- 54 太田亮著『姓氏家系大辞典』(国会デジコレ 1130938 コマ546 所収) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1130938>
- 55 ブログ「フジレキシ」書影: http://fujinoyama.blogspot.jp/2011/04/blog-post_03.html
- 56 福永酔剣『日本刀大百科事典』4巻 雄山閣 1993, 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN10133913>
- 57 「大和国平野殿庄惣追捕使平清秀瓜送進状」(『東寺百合文書』ヨ/函/81/1)
<http://hyakugo.kyoto.jp/contents/detail.php?id=5314>
- 58 本間順治,佐藤寒山編『古刀鑑定編』(中)(日本刀講座.3) 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA33698475>
- 59 得能一男『刀工大鑑』工芸出版,2004 p.478 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA68243970>
- 60 川口陟著：飯田一雄校訂『刀工総覧』刀剣春秋新聞社,1972, 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA3459107X>